僕の世界。君の世界。

十 琉御蒔 煌爛 十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の世界。君の世界。

【Nコード】

N8359H

【作者名】

十琉御蒔 煌爛十

【あらすじ】

高校入学で出逢ったのは“光”という少年。彼から告げられる事実に一抹の不安を感じながらも、いつもと変わらぬ日常に安堵していた。だが身の回りで次々と起こる出来事は、そんな平和な日々を奪っていく。それらは全て、ある一人の男の復讐心によってなされたものであった。その男は大昔に神々が行ったある暇つぶしの“ゲーム”を再開させようとしている……。

1 出逢い

“キーンコーンカーンコーン”

高校生活初めてのチャイムが鳴った。

この音を聞いて、やっと高校生の実感がわいてくる。しかし、チャイムを校門の外で聞いたということは、おそらく遅刻したのだろう。私はできる限りの速さで足を動かした。

「遅れてすみません!!」

ドアを勢いよく開け、教室に滑り込んだ。

その瞬間、頭の上からなにやらゴツゴツした物が落ちてきた。

「…っ痛〜?」

「なあにやっとなだ。早くせき着かんとも一回どつくと」

顔を上げると担任の教師と思われるマツチヨな中年男がいた。

「ごめんなさい!」

私は慌てて指定された席に着いた。

“ガラガラガラ…”

どうやら遅刻は自分だけではないようだ。

ゆっくりと開けられたドアからは可愛い顔が覗いていた。

「やあっと全員揃ったかあ。はよ席着かんかい」

「いやあ、寝坊しちゃって。ゴメンゴメン」

タメ口・・・第一印象は大事だが、あの顔なら嫌われる事はまずないだろう。

可愛い顔の子は、にっこりと笑って私の隣まで歩いてきた。

「今日からお隣さんだね」

なんだ、席が隣なのなのか。

「よろしくね」

だが、見る限りこの学校の席順は男女交互の列になっているはずだ。隣に女の子がくるはずがない。

「え！？ズボン…」

「ん？それがどうかした？」

「もしかして男の子?!」

本気で女の子だと思ってしまった。

他にも私と同じ勘違いをした人が多数いたらしく、クラス中がざわついた。

「女にしては背デカいと思ったら…」

「男子だったんだあ」

周りの人達が話している内容に気づいたようだ。

「みんなヒドい！！ワタシをなんだと思ってるの！！」

そう言っつて可愛い男の子はおどけて見せた。

それによつてクラスの雰囲気明るくなった。

さっきまで誰とも話していなかった大人しそうな人達まで笑い転げていた。

「俺、肴山いしやま 光ひかつていうんだ。君は？」

いきなり話しかけられてびっくりしたが、なんとか平静を装い、応えた。

「あ、私は水野みずの 林檎りんごだよ」

すると、肴山光はにっこり笑つてこう言った。

「よろしくね。林檎」

いきなり呼び捨て？

「「ちら」そ、よろしくね。肴山君」

「光って呼んでよ。せっかくのお隣同士じゃないか」

「え？えつと・・・」

「瞬迷ってしまったが、よく考えれば同い年なのだ。気にする必要はない。」

「わかった。よろしく光」

こうして、私の高校生活が始まった。

2 疑問（前書き）

だいぶ間が空いてしまいました。次からもこうなると思いますが、それでもいいという方はどうぞ。（・・。・・。）

2 疑問

「遅れてすみませーん」

「まあたお前か肴山」

「今日は重い荷物を抱えたお婆さんを助けててさあ」

「わかつたからはよ入らんか」

あれから毎日と言っていい程このやりとりを聴いている。

大抵は一限目の途中に入ってくるのだが、二限目になってしまつたともあつた。ホームルーム中に登校してくればまだいい方だ。

「林檎、ノート見せてくれない？」

「・・・いいよ」

「サンキュー」

コレも毎日。

まったく、何しに学校に来てるんだかわからない。

「光、なんでこんなに毎回毎回遅れてくるの？」

聞いてどうにかなるわけでもないが、何となく聞いてみた。

「だから言ったっしょ？お婆さんを助けてたって」

「そう毎日ハプニングなんておこるわけないでしょ？こないだだって車に引かれそうになった猫を助けてたとか言い訳して。しかも嘘くさいし」

「そんなことないよ。俺が心優しいから誰でも助けたくなくなっちゃっただけさ」

「あっそ」

少しイライラしてきた。

すぐにわかる嘘なのにそれを突き通してる。

一体なにを隠そうとしてるんだらう？

その日の体育の授業。

私達女子は更衣室でジャージに着替え、体育館へと向かった。

その途中、男子の群れが猛スピードで横を通り過ぎた。

「野郎ども〜！！ついてこ〜い！！」

「イエッサー〜」

クラスでムードメーカーになりつつある新井慎二が先頭になって引っ張っている。そのすぐ後ろに光がいた。

「小学生か？あいつ等は」

女子は呆れてため息をついた。

今日は女子の担当の先生が出張で休んでいるらしく、代わりの先生が来ていた。

担当の先生がいなくて授業を進めることが出来ないので、とりあえずドッチボールをすることになった。

最初はほとんどがだらけていたが、1人の女子生徒が力一杯投げたボールが相手側の子の顔面に当たり、それにキレたその子がこれまた力一杯投げ返した。そこから先は女の戦争状態で、手が付けられなくなっていた。

「やあつと終わった」

「もう体力残ってないよ」

「さあ弁当弁当」

力を使い果たした女戦士達はへとへとになりながらも教室にたどり着いた。

弁当を取りに席へ向かうと、誰かに肩をつかまれた。

「お疲れ、林檎。すごかったねえ〜女子のドッチボール。男子がみんな震えてたよ」

「なんだ、光か。誰かと思ったよ」

「なんだとはなんだ。人がせつかく心配してあげたのに」

「ハイハイ、ありがとうございます・・・ん？」

いじけた光の目を見て、私は違和感を覚えた。

「どうした？」

「光、どっか外国の血混ざってる？」

「なんで????？」

「なんか目が青いような・・・」

「!?!?」

私がそう言った途端、光は私の肩から手を離し、目を背けた。

「そ、そお？そんなことないよ。じゃあ飲み物買って来なきゃいけないから、また後でね」

そう言っつて光は走り去ってしまった。

彼の机に目をやると、飲みかけのオレンジジュースが転がっていた。

「体のどこかに痣みたいなのがあった？」

「!？」

林檎には身に覚えがあった。

だから少し驚いて光の目を見つめた。その瞳は黒く、どこまでも深い。しかし、場所によって微妙に色が違うようだ。

不思議な瞳……。

「痣が……あるんだね？」

「……うん」

光の様子がおかしくなったあの日、帰宅後すぐに風呂に入ったのだが、風呂場にあった鏡を見て驚いた。

「何・・・コレ・・・」

鏡をのぞき込むと、右の鎖骨のあたりに上を向いた矢印のような痣が出来ていた。

大きさは3センチ。

色は灰色。

「昨日まではなかったのに。どうしたんだろ？」

触ってみたが、特に変わったカンジはしなかった。

他に異常があるわけでもないのに、その時はほおっておいたのだ。

「・・・あるよ」

「ヤッパリね。どこにある？見せて」

「やっぱりって？どうして知ってるの？これが何か知ってるの？」

「確認してからじゃないと話せないよ」

「見せたら、隠してることを教えてくれる？」

「俺が考えてるものと合ってたらね」

「わかった」

私は制服のリボンをとり、ワイシャツのボタンを2つ開け、右の襟を広げた。

そして右の鎖骨、つまり痣を指差した。

「1111」

光は私の痣を見つめてため息をついた。

「アタリだ。教えてあげるよ、その痣の正体。鏡持ってる？」

「うん」

「それで自分の痣を見てて」

私はポケットから鏡を取り出し、痣を見た。

「よく見てな」

そう言って光は私の痣に軽く触れた。

その時、痣に変化が起こった。色が変わり始めたのだ。

「ウン……」

瞬く間に痣が変わっていき、とうとう水色に変わってしまった。

「なにしたの？」

「触れただけさ。俺の目を見てて」

素直に従い、光の目を見た。綺麗で真っ黒な瞳の中に深い青色をした矢印が浮かんでいる。

「同じ……？」

「そうだよ。そのまま見てて」

そう言って光は私の痣から手を離れた。すると、光の瞳の矢印がすうっと消えていった。

「なくなっちゃった・・・」

「痣を見てごらん」

自分の矢印を見てみると、さっきの水色から灰色に戻っていた。私はワケがわからず、自分の頬をつねった。とても痛かった。

「夢じゃないよ。現実さ。この痣はテイワズっていうルーン文字だよ」

「テイワズ？なにそれ？」

「林檎、君は俺のコンフォーマー、つまり適合者さ」

「適合者？」

「うん。俺のパートナーだ」

ますますワケが分からない。

ルーン文字というものは聞いたことがある。古代、古くから使われていた文字だ。その文字にテイワズというモノがあるんだろうが、パートナーとはどういうことだろう？何が適合したのだろうか？

「いいかい？今から言うこと、よく聞いて」

昔々、天の世界に神々の楽園があつた。

神は人間を作り、その人間の社会の発展を観察し、真似することとで暇をつぶしていた。

ある時、人間が戦争を始めた。神々はそれも真似をした。

ランドピール（陸の人々）とシーピール（海の人々）、この二つに分かれて戦うことにした。しかし、神々は戦うすべを持たない。そこで、人間の真似をして兵隊を持つことにした。人間と同じ形の生き物を52人作り、ランドピールとシーピールに26人ずつ分け、区別が付くように体のどこかに印を付けた。ランドピールは赤、シーピールは青。その際、ルーン文字を用いた。26文字のルーンを1人1人に、その文字ごとに違う能力を与えた。つまり、同じルーンで同じ能力を持つ兵士が相手国にもう一人いるということだ。

最初は兵士達だけを人間界に送り込んでその様子を見ていたが、同じ力量の者同士で戦ってもなかなか決着がつかなかった。

そこで人間を使おうと考えた。人間は時に思わぬ力を発揮することがある。その力を利用し、兵士達一人一人のエネルギーの波長がピッタリ合う人間（適合者）にもルーンを付けた。兵士達は同じルーン

ンを持つ数人の適合者からエネルギーを吸収し、強くなっていく。そうして個人差を付けたのだ。兵士とその適合者は自然と引き寄せられる。そして互いに触れ合って初めて適合者は秘められていたルーンのエネルギーが開花する。

神々はどちらが勝つか賭けをして楽しんだ。

しかし、ある時。

神々が喧嘩をし始めた。

ランドピープルが強い。いや、シーピープルの方が強い。そっちは卑怯だ。そっちは卑劣だ。

こうしているうちに暇つぶしのゲームは本物の戦争となっていくた。

3 昔話（後書き）

ちよつと意味がわかりにくかったと思います（^^）。わからなかったところがあればジャンジャン教えてください。評価もしていただけるとありがたいです。

4 驚き

「・・・それは・・・どこの神話？」

意味が分からなかった。いきなりそんな話をされてもどう反応してよいのだろうか？

「どこのって・・・俺達に伝えられてきた話だよ。俺にもどっからどこまでがホントなのかはわからないけど」

「俺達？誰のこと？」

「俺のようにルーンを持つ人のこと」

「え！？今の話の兵士のこと？ホントにいるの？」

「変なこと言うなあ。目の前にいるじゃんか」

「あ」

そうだ。今の話が全てホントかはわからないが、実際にルーン文字を体のどこかに持っている人は存在しているのだ。

ということは、自分は光のエネルギーと同じ波長を持つ人間なのか？

「適合者・・・？」

思わず自分を指差して呟いた。

「そう、コンフォーマー」

「コン・・・フォー・・・マー・・・」

ということとは？光は兵士？神様の戦争の兵隊さん？じゃあなんでこんな所で学生をやっているんだろう？なんでこんなに平和に暮らしているんだろう？

なんだか考えすぎて頭がおかしくなりそうだ。

足元がふらついてきた。

私はそのまま倒れてしまった。

“ チュンチュンチチチ ”

鳥のさえずりが聞こえる。

朝か。起きなければ。

強い日光を浴びてなかなか目が開けられなかったが、ようやく部屋の天井が見え・・・ない？

「 !? 」

「 あ、起きた。おはよう。お嬢さん 」

誰かが自分の顔をのぞき込んでいる。
私は思わずその人を両手で突き飛ばした。

「 きゃあ!!?? 」

「 のわ!! 」

“ゴン”

鈍い音がして、誰かが痛みに呻く声が聞こえた。

「だだだだだだ誰!？」

「ヒドいなあ林檎。何するんだよ」

「え!？ウソツ!？光?なんでこんなところに?」

「なんでって、自分の家だモン」

「は?」

驚いて部屋の中をよく見ると、見慣れぬモノがたくさんあった。天井まで届きそうな背の高い本棚。こざっぱりしたシルバーの机。背の低い横長の洋服たんす。背もたれのない柔らかそうなソファ。そして何より、キングサイズと思われるベッド。部屋自体も広く、林檎の部屋が5つは優に入ってしまうだろう。部屋の半分にはほとんど何も無い。扉に近い方には机やら何やらが並んでいるのに、奥側にはまるで生活感がなかった。スペースは広くても生活範囲は狭そうだ。それでも埃一つ見えないのは掃除が行き届いている証拠だろう。全体を白い壁に覆われ、柱や扉は藍色で統一された清潔感のあるシンプルな部屋だった。

「なんでって、女の子が男の子の家に泊まるなんてそんなに気軽に
する事じゃないでしょ!?!」

光は尚も首を傾げる。

「っていつか光!!!人の寝顔覗き込んで何してたの!?!」

「いや、カワイイなあって」

「なっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

よくもまあそんな恥ずかしいことをいえるものだ。

林檎は自分の顔が真っ赤になるのがわかった。

「どした?」

「何でもない!?!」

「だって、顔真っ赤だよ?」

そう言って光はニヤリと笑った。

「確信犯か!!」

「なにがあ？」

「とぼけるな!!!!」

「怒った顔もカワイイね」

「まだ言つか!!!!」

.....

まだまだ終わる気配はなさそうだ。

• • • • •

4 驚き(後書き)

今回は更新が早かったですね。評価、感想をお待ちしております。

テイワズ（前書き）

これは光目線のお話です。本編ではわからなかった事が多数書いてあります。

「！！注！！」光目線なので、少しエロくなっております。

テイワズ

(まいったな・・・)

光は今、学校の教室のド真ん中に座り込んでいる。膝にはうなり声をあげながら気絶している林檎がいた。

(ずっとこのままっていうわけにもいかないし・・・林檎の家だっ
て知らないし・・・あ、でも明日学校休みだから、俺んちでもいっ
か)

と、勝手に納得して声を出して頷いた。

当然返事が返ってくるはずもなく、羞恥でほんのりと耳を染めなが
ら立ち上がる。

林檎を背負った瞬間、驚いて思わず声をあげてしまった。

「うお!？」

林檎の体は想像以上に軽かった。

そういえば女の子をかついだのは初めてだ。

そう考えると、無意識に林檎に触れている部分に意識がいつてしま
う。あたたかくて、全てがやわらかい。

そして、シャンプーだろうか。とてもいい香りがする。

全身で林檎を感じて、光の顔が火照ってくる。

その時、自分の肩に乗っている林檎の頭が動いてさっきよりも強く林檎の香りを感じた。

林檎の方を見ると、こっちを向いて寝息をたてている。

あまり直視できずに目をそらすと、首に林檎の息がかかった。

(長時間この体勢でいるのは無理そうだな)

光は小走りで自宅へ向かった。

「ただいま!!!!!!」

玄関に飛び込み、急いで靴を脱ぎ、林檎の靴を脱がせ、急いで部屋に走って行った。

(ヤベエ!!!!限界だ!!!)

あと三步が耐えきれずに、林檎をベッドに投げ出した。そのまま床に倒れ込み、息を整える。林檎の方は少し唸って寝返りを打っていた。

「部屋が一階でよかった・・・」

「ヒカちゃん？どうしたの、そんなに慌てて」

声の方を見ると左の手の甲に縦線模様のルーン文字、アイサーを持つ私立小学校教師、平河 美月^{みつき}28歳と、そのコンフォーマーの山口^{やまぐち} 渚^{なぎさ}20歳がポカンと立っていた。しばらく部屋の様子を見ていたが、光のベッドの上にいる少女を見てすぐに光に駆け寄ってきた。

「よくやったぞ光！！！」

「ついに彼女ができたのね！！ヒカちゃん！！」

そう言つて2人は光を撫でまわした。

一方光の方は、動けるようになるのを待って2人を部屋から出してドアを閉め、今までのことを話した。

「へえ、コンフォーマーを見つけたのか。光」

「ん」

「なあんだ。彼女じゃないの？」

「いつそうなったんだよ」

「で？なんでそんなになるまで走ってきたんだ？」

「いや、それは・・・」

さすがに答えられなかった。

女の子に免疫がなくて長く触れていられなかった、なんて言ったらからかわれるに決まってる。

「寒かったから運動したかっただけさ」

光は適当にはぐらかして、いつもの3倍かいた汗を落とすため風呂に向かった。

「はあああ。疲れた・・・あのキャラやめたいな・・・」

学校では世間体が悪いという理由で元気な少年を演じているが、本来の光はそうではない。

元気なことに変わりはないが、笑顔を振りまくなんてことはしないだろう。

しかし最近は体力がもたず、気を抜くといつものしかめっ面になってしまう。

ルーンを持つ者は一度コンフォーマーと接触してしまうと、能力を得る代わりにエネルギー消費が激しくなりコンフォーマーからエネルギーを吸収しなければいけなくなる。

最近、林檎が話しかけても反応が乏しかったのはそのためだ。

(林檎が起きたらもらっておいこ)

風呂からあがり部屋へ戻ると、林檎はまだ寝ていた。

(朝まで起きそうにないな)

光はため息をついてリビングへ向かった。

今晚のメニューはオムライスだった。

オムライスの上にはケチャップで“おめでとう”の文字が書かれている。

「今日はヒカちゃんが初めてコンフォーマーを見つけたお祝いだよ。だからヒカちゃんが好きなオムライスにしたんだ」

光の目が心なしか輝き始めた。

「お前本当にオムライス好きだよな」

渚がニヤニヤしながらビールをジョッキで飲んでいる。

「うるせえ!!」

口ではそう言いながらも光はオムライスから目を離していなかった。

(林檎に持ってこうかな・・・)

しかしその後も林檎が起きる気配はなく、諦めて寝ることにした。ベッドには林檎が寝ているので、光はソファだ。部屋にあるのは二人用なので足がはみ出してしまうが、林檎を引きずり落とすわけにもいかないので泣く泣くソファに体を埋めた。

「まったく渚のやつ・・・一晩くらいベッド使わしてくれてもいいのに・・・子供みたいに文句言いやがって」

さつき渚の部屋を訪ねたとき「なにが悲しくて男と寝なきゃなんねえんだ!!」と門前払いされてしまったのだ。

林檎は相変わらずぐっすりだ。その間も光のエネルギーは減っていない。

「人の気も知らないで・・・」

“ゴン”

「っ!？」

光は鈍い音を聞いて目が覚めた。

(なんだ!?)

辺りを見渡すと、林檎がうつぶせで床に落ちていた。

「・・・」

しょうがなく体を起こして林檎をベッドに戻した。

その時、また林檎の体温を感じた。そしてまたベッドに投げ出す。

光はベッドの横にしゃがみ込み、赤く染まっているであろう自分の顔を両手で覆った。

「こんなんでこの先どおすんだよ・・・」

「んん・・・」

「!?!」

林檎の寝言だ。ビックリして軽く飛び上がってしまった。林檎の寝顔を見ると、ぶつけた額と鼻の頭が赤くなっている。

「・・・かわいい・・・いい」

自分で口に出して恥ずかしくなってしまった。

その時、光の体がふらついた。

どうやらエネルギー切れのようだ。

耐えきれずに光は林檎に覆い被さる。そして林檎のワイシャツの襟を広げ、右の鎖骨にあるテイワズのルーンにキスをした。エネルギーはこの状態にしばらくなっていれば吸収される。基本的には食事と同じ原理なのだ。

ある程度吸い取ると、外で鳥が鳴き出した。

“ チュンチュンチチチ ”

そのせいか、林檎が起きてしまった。
光は急いで唇を離した。

そのままだとあとが面倒だ。

「 あ、起きた。おはよう、お嬢さん 」

朝の挨拶をしただけなのだが、なぜか林檎に突き飛ばされてしまった。

「 きゃあ! ! ! ! 」

「 のわ! ? 」

“ ゴン ”

頭を柵の角にぶつけてしまった。

「 いってえ . . . 」

地味に痛かった。

「だだだだだ誰!？」

「ヒドいなあ林檎。何するんだよ」

「え!? ウソツ!? 光? なんでこんなところに?」

「なんでって、自分の家だモン」

「は?」

林檎はキヨロキヨロと部屋中を見始めた。

「光の家?」

「そう」

「へえ・・・光って金持ちなんだ」

「それでもないよ。家が無駄に大きいだけで」

「ふうん・・・・・・・・・・・・・・・・って!! そうじゃなくて!!
!!なんで私が光の家で寝てたの!？」

「だあってえ。林檎、あのまま寝ちゃうんだもん。林檎の家知らないし、次の日休みだから大丈夫だろうと思って」

自分でもこんなに恥ずかしいことをよく言えたなと思ったが、林檎の反応が面白くてさらにからかった。

この時、光は自分がさだと初めて知った。

5 波乱

光にからかわれて言い返す。
このやりとりを五分程続けていた。

しばらくすると、廊下をドタバタと乱暴に走ってくる音が聞こえた。
その直後、部屋のドアが勢いよく開き、誰かが入ってきた。やむを得ず私達は一時停戦した。

「ゴルアアアア!!!!!!人が眠ってんのになに騒いでんだてめえはあ!!!!!!!!!!!!」

若い男の人が扉を全開にして仁王立ちで叫んでいる。
その声に負けじと光も叫んだ。

「うるせえのはてめえだ若禿!!!」

確かに薄めだが、禿というほどではないだろう。

「んだと女顔!!!」

「あ!!!!人が一番気にしてることを!!!!!!」

「だから言ったんだよ!!!!俺だって毎日頭皮マッサージしてんのに

この量なんだから仕方ねえダロこの野郎！！！！」

「かつわいそ〜。俺その気持ちわかんねえわ」

「あんまり大人からかうと痛い目みんぞ」

「へええあんた大人だったんだあ」

「んだとクソヤロ」

男の人の怒りが頂点に達しようとしたとき、後ろから何かが飛んできた。

“ スパ ン！！ ”

それは男の人の頭にヒットして落ちた。

「ス、スリッパ……？」

スリッパが飛んできた方向を見てみると、1人の女性が立っていた。身長は170センチ以上ありそうだ。年は30前だろうか？

「いい加減にしなあんたたち！！！」

「「すみません」」

気がつくと、光と男の人が土下座をしている。

「毎日毎日喧嘩して!!!いつになったら飽きるの???.....」
あら、林檎ちゃん、おきてたの」

「あ、おはようございます」

つい条件反射で答えてしまった。
しかし、この人達は誰だろう?年の離れた兄弟だろうか。

「林檎ちゃん、シャワーあびといで。服はあたしが貸してあげるよ」

「ありがとうございます・・・」

「美月のはでかすぎるんじゃないか?身長全然違うだろ」

これは男の人の意見だ。

確かに、この美月というらしい女性の身長は170を越しているそうだが、林檎は150程しかない。

「そうねえ。でもあたしの小さい頃はないし・・・」

しばらく考えたあげく、大人2人は光の方を見ていた。その視線に気づいた光は、呆れ顔でため息をつく。

「男物着せてどうすんだよ」

それを聞いて、美月が光の耳元でなにかをつぶやき始めた。すると、光が顔を赤くして鼻を押さえた。手の隙間からは赤い液体がポタポタ垂れ、男の人が急いでティッシュを持ってきた。

美月は腹を抱えて笑っているが、林檎には状況が読めなかった。

「ひ、光！？どうしたの!？」

「い、いや!!これは別にそういうことじゃなく!!!!」

「????」

「ヒカちゃん、林檎ちゃん意味わかってないよ。あたしが教えてあげよっか?」

美月が笑いをこらえながら言った。

しかし、光がそれを阻止しようとしている。

「オイ馬鹿！！ヤメロ！！！」

そのやりとりを聞いているうちに男の人が笑い出した。

「美月、そのへんにしてやれよ。男のサガなんだから」

「ふ〜ん？じゃあ渚もあたしがそついう格好したら鼻血出す？」

「・・・さあ？」

その瞬間、林檎の視界が暗くなった。

「ふえ！？」

驚いて変な声をあげてしまった。

「林檎、自分の耳ふさげ」

どうやら光が両手で目隠ししたようだ。

林檎はそれに従った。

だが、ものすごい音と声が隙間から聞こえてしまった。

“ドカツバキツメキメキ”

「ギャー！！助けてくれ光！！！」

・・・だんだん声が聞こえなくなってきた。

声が完全に聞こえなくなると、光が手を離し、目の前の状況がなんとなく理解できた。

光が男の人の変わり果てた姿を見てこう言った。

「うーん・・・今のは渚が悪い」

・・・どうやら男の人は渚というらしい。

テイワズ2（前書き）

再び光目線です。純粹な男の子なので、多少エロくなります。今後
もそうなると思います。ご了承ください。

ティワズ2

“ スパ ン！”

いきなり廊下からスリッパが飛んできて渚の頭にヒットした。

驚いた三人は廊下の一斉に奥を見る。

そこには投球後のピッチャーのようなポーズをした美月がいた。

「いい加減にしなあんた達！！」

二人とも美月に逆らって無事ですんだ覚えがない。下手をしたら朝食にありつけなくなるのだ。とっさに二人は土下座で謝った。

「すんません」

「毎日毎日喧嘩して！！いつになったら飽きるの！？……」
・・あら、林檎ちゃん、おきてたの」

「あ、おはようございます」

渚と光は扱いの違いにムツとしたが、美月は気にしない。

「林檎ちゃん、シャワーあびといで。服はあたしが貸してあげるよ」

「ありがとうございます・・・」

「美月のはでかすぎるんじゃないか？身長全然違っただろ」

確かに、美月と林檎では全く体型が違う。

美月は背の高いモデル体型だが、林檎は比較的小柄な方だ。

「そうねえ。でもあたしの小さい頃はないし・・・」

それはそうだ。

この家は元々光の両親の家で、五年前、光は通っていた小学校で研修をしていた美月がいつも手袋をしていたのを不審に思い、好奇心で美月の手袋を外したところ、傷痕にしては黒く、きれいすぎる模様を見つけた。

美月は最初にはぐらかしていたが、光の瞳の中につつすらとティワズの文字があるのに気づき、自分の痣がアイサーというルーンである事を教えた。

その後光が学校を卒業し、今まで孤児院で過ごしていた光を美月が引き取り、光の両親が残したこの家で一緒に暮らすことになったのだ。

そんな事を思い出してしばらく感慨にふけていたが、美月と渚の視線がこちらに向いているのに気づいた。

光はその意味をすぐに理解してため息をついた。

「男物着せてどうすんだよ」

確かに光が一番身長が近い。しかし体系は全く違う。光は細身だが、身長は168センチ。筋肉も同年齢の平均ぐらいはある。

そんな人の、しかも男の服を少女に着せるのは少し気が引けた。そこで美月がこちらに近寄って耳を貸せと合図したので、美月に耳を傾けた。

『バカねえ。小柄な少女の林檎ちゃんがダボダボな男物の服を着てるの想像してみなさいよ』

光は言われた通りに想像してみた。

光が持っている灰色のパーカーと長いベージュのズボンを林檎が着ている。

光が着るときはそうでもないのだが、サイズが違うのでとても動きづらそうに思えた。

パークーの襟は広く開き、首筋がよく見える。

袖からは細くて小さい指先。

ズボンの裾からはちよこんと足先が出ている。

それが光にはとても幼く見えて、今すぐ抱きしめたくなった。

不意に鼻の奥が温かくなる。それが鼻血だとわかって急いで鼻を押さえたが、数滴垂れてしまった。

横で美月が腹を抱えて笑い、それを見ていた林檎は慌てていた。

「ひ、光!?!どうしたの!?!」

「い、いや!?!これは別にそういうことじゃなく!?!」

光は変態と思われるのがいやなので言い訳をしようとした。しかし林檎は状況がわかっていないようで、少しほっとして渚が持つてきてくれたティッシュで鼻血を拭いた。幸い鼻血は少しだけで、すぐに止まった。

「?????」

「ヒカちゃん、林檎ちゃん意味わかってないよ。あたしが教えてあげよっか?」

美月が笑いをこらえながら言った。そんな事をされてはもちろん困るので、光は全力で阻止しようとする。

「オイ馬鹿!?!ヤメロ!?!」

「美月、そのへんにしてやれよ。男のサガなんだから」

渚がフォローしながら笑いをこらえている。

「ふん？じゃあ渚もあたしがそういう格好したら鼻血出す？」

美月が渚にニヤニヤしながら聞いた。渚は少し考えて答える。

「・・・さあ？」

これはまずい。

明らかに美月の表情が変わった。

こつこつ修羅場はまだ林檎に見せなくなかったので、両手で林檎の目をふさいだ。

「ふえ！？」

「林檎、自分の耳ふさげ」

林檎は素直に従ったが、おそらく完全には防げなかっただろう。

“ドカツバキツメキメキ”

「ギャー！！助けてくれ光！！！！」

そんな事出来るわけがない。

渚が必死で逃げようとするが、美月がそれを許さない。

「乙女の心踏みにじってんじゃねえよ」

美月が低い声で渚を脅している。

渚はだんだんと抵抗する力を無くしていき、最後にトドメの一発。

美月のかかとがみぞおちに入った。

渚が床に力尽きて倒れる。

美月も気が済んだようで、光の机の横にあったローラー付きの椅子に座り、くるくる回っていた。

もう平気だと確認してから両手を林檎から離れた。林檎はなんとなく意味がわかったようで、苦笑いしていた。

光は渚の安否を確認しに渚の横にしゃがみこんだ。

大丈夫だ。息はある……。

さすがにそこらへんは美月も手加減したのだろう。だがあそこで美月を怒らせたのは間違いだった。

「うーん……今のは渚が悪い」

テイワズ2（後書き）

どうでしたか？みなさんもなんとなく光の性格が掴めてきたんじゃないかと思います。これからもテイワズ編がたまに出ってきます。

6 微笑み（前書き）

久々の投稿です（ ） b

何とかありませんかね、この怠け癖（泣）

それでも続けて読んでいただければ助かります

6 微笑み

現在林檎は、美月に言われてシャワーを借りている。
お湯ははっていないが、湯船もなかなかの広さだった。これは・・・
大理石というやつだろうか？

「なんか・・・面白い人達だったなあ」

光の家族構成が未だにわからず、すっきりしない。

あんなに騒いでいて他の人が来ないのはおかしいので三人家族だと思われるが、それなら光の両親はいないのだろうか？

まさかあの二人という事はないだろう。美月が母親なら小中学生ぐらいの時にうんだことになる。それを考えると渚など論外だ。

三人とも兄弟か親戚の可能性が高いが、それにしても似ていない。

「光に聞いてみようかな・・・教えてくれるかはわかんないけど」

光の両親がもう亡くなっているのであれば光も話しくいだろう。

風呂から上がり、脱衣所で濡れた体をタオルで拭きながら着替えを探す。

美月があとで置いておくと置いていたのだが、見つからない。

「??？」

その時、誰かがドアをノックした。

「林檎ちゃん、遅れてごめんね。着替え持ってきたよ」

美月の声だ。

「いえ、ありがとうございます」

「入るね」

“ガチャ”

美月が手に服を持って入ってきた。

「やっぱりサイズが合うのが見つかなかくてさあ。光の服持ってきたんだけど、いい？」

「大丈夫ですよ。小さい頃はよく兄の物をおさがりで着ていたので」

「お兄さんいるんだ。いいなあ。あたしは一人っ子だったから兄弟って懂れてんだよね」

「みなさんは兄弟じゃないんですか!？」

驚いて着替えていた手が一瞬止まった。

「え？光と渚のこと？違う違う。あいつ等は・・・そおね・・・同じなのよ」

「同じ？」

「そう。コレよ」

美月はそう言っって左手の甲を見せた。

そこには黒い刺青のようなモノがあった。しかしただの一本線だ。

「コレはアイサー。ルーン文字よ」

「え!？美月さんもルーンを持つてるんですか？」

「うん。んで、渚はあたしのコンフォーマーなの。背中の中あたりにアイサーがあるわ」

「そうなんですか・・・同じってそういう意味なんですね」

「そう。なかなかルーンを持つ人は見つからないからね。独りより

「は気が楽でしょ？」

「じゃあ三人で相手側の人と戦ってるんですか？」

「へ？」

美月が口をポカンとあけてこっちを見ている。
なにか変なことを聞いただろうか？

「なに？光、ちゃんと話してないの？」

「え？神様の戦争じゃないんですか？神様達が暇つぶしに兵隊さん
を作ってゲームしてたら喧嘩になって戦争になっちゃったんじゃない
・
・
・」

いきなり美月が笑い出した。

「な、何ですか？」

「あはは、光、そこまでしか話してないの？」

「そこまですりすぎですか？？」

「うん。実はその戦争、もうとっくに終わってるの」

「そうなんですか！？」

「神様の中でも偉い人が止めに入ってやめさせたらしいの。そのあと地球に残った兵士達はコンフォーマーの人間と子供を作って楽しく過ごしたそうよ。私達はその子孫ってこと」

「なんだ、よかった。光が話してたことは全部過去の事なんですね」

「そういつ事」

全く、人騒がせだ。

そうならそうと言ってくれればよかったのに。

「さ、あたしは朝ご飯作んなきゃ。ご両親にはもう連絡したでしょう？」

「はい。さつき電話しました。だけど1日ないくらいで騒ぐ人達じゃありませんよ。兄が3日間彼女の家にいて連絡してなかった時もそんなに怒られていませんでしたから」

「そう・・・マイペースなお兄さんなのね・・・。じゃあとで呼ぶからそれまでくつろいで。昨日食べてないからおなか減ったでしょ」

「はい。あの、お手伝いできることがあれば何でも言ってください」

「まあ、林檎ちゃんはいいい子ね。あたしあいつ等からそんなセリフ聞いたことないわ。でもいいわよ。すぐできるから」

美月はそう言つて脱衣所から出て行つた。
林檎は髪を乾かしたあと、とりあえず光の部屋に戻ることにした。
部屋のドアが少しあいている。そこから誰かの声が聞こえた。

「いつてえ・・・」

「お前なあゝあんな事言つたら美月が怒るのわかつてんだろ？」

光と渚の声だ。

「当たり前だ。わざとだよ。あそこで認めちまつたらマジで男物着
そつだろ？ああいうのはたまにしか見れないからいいんだよ。常に
着てたら見慣れちまう」

「・・・エロガツパ」

「んだと！？お前こそ鼻血なんか出しやがってムツツリが！！」

「誰がムツツリだハゲカツパ！！！」

「はげてねえ！！ちよつと髪が多いからつて調子乗つてんじゃねえ
ぞ女顔！！！！」

「俺は男だ！！！」

「オカマ野郎!!」

「うすらハゲ!!」

「うすら言つな!!」

なんだか小学生のケンカみたいだ。
面白いのでしばらく見ていたが、ふとあることに気がついた。

(光ってこんなに口悪かったっけ?)

光の印象はとても明るくてかわいく笑う少年だったのだが、今日の前にいる光は不良と対等に喧嘩できる程に口が悪い。
目つきもそれなりに悪い。

(これで金髪だったりしたら・・・)

それを想像してクスクス笑っていたが、腕が扉に当たってしまった。
その音でこっちに気づいた2人が林檎を見る。

「あ、ごめんなさい!!盗み聞きするつもりじゃなくて、じゃましちゃ悪いと思ったから・・・」

林檎がなんとか言い訳を考えようとしていたが、2人は聞いてもいないようだ。渚は林檎を見るなり光に視線をやっている。光は目を見開いて口もポカンとあけていた。そしてみるみるうちに顔が赤くなっていく。

「あの・・・どおしたんですか・・・？」

「いや、何でもねえよ。あ！！えと、ちょっとごめん！！」

渚はそう言って慌てて光を部屋から連れ出した。

一人部屋に残された林檎は状況が読めないまま閉められた扉を見つめた。

しかし何もすることがないので部屋の中を探索することにした。

部屋の壁一面分を覆い隠している背の高い本棚。これがさつきから気になっていた。普段光はどんな本を読んでいるんだろう？

本の表紙を見てみると、参考書や、辞典、いろいろな図鑑、医学書、六法全書まである。それに、林檎にはなんて書いてあるのかわからない外国の本が本棚の半分程を占めていた。多分ほとんどは置いてあるだけだろう。

隅の方にやっと高校生の男子らしい漫画やゲームの攻略本が数冊あった。

光は一体なにを目指しているんだろう？

医学書から考えると医者だろうか？

次に机を見てみた。シルバーの板に脚が四本つけてあるだけのシンブルなものだ。机の上にはペン立て、電気スタンド、学校の教科書

などが立てられている小さい棚、携帯電話の充電器があった。とてもきれいに整理されている。

その横には先ほどまで林檎が寝ていた大きなベッド。普通のモノより少し高さがあり、飛び込むには持つて来いの低反発っぷりだ。真っ白なシーツに白い枕。そして青いフカフカな羽毛布団。高級感あふれるベッドだ。

背が低く、横に長い焦げ茶色のタンス。

その上には手のひらサイズの四角い箱と写真立てがある。

写真には楽しげに笑う若い男女と、2人の間で両手を広げて得意げに笑う三歳ぐらいの男の子が写っていた。

幸せそうな家族の写真だ。

よく見ると真ん中の男の子はペンダントを首に下げている。透明な青いプレートだった。そこにはなにか文字が書いてあるようだが小さくて読めない。

四角い箱には南京錠がかけられていた。今まで気づかなかったが、箱の影にはフワフワのウサギのキーホルダーがあった。林檎はウサギが大好きだ。目が離せずにとウサギを見ていた。

そこに光が帰ってきた。

「林檎？どうしたんだ？そんな格好で」

光が林檎の視線をたどってウサギを見つけた。

「……欲しいならやるよ」

「え！？でも・・・」

「趣味じゃないから。それに、そういうの好きそうだな。林檎」

「うん。ウサギは好きだよ」

そう言っただけで笑った林檎を見て光は軽く目尻を垂らす。
その表情がいつもの光とは違う気がした。

「光」

「ん？」

「さっきから変だと思ってたんだけどさ。光、学校にいるときなんか違うよね。今は可愛い感じじゃないもん」

「な！？か、可愛い…！？ま、まあ…学校の時と素の俺が違うのは事実だよ。中学の時には素でやってただけけど、そしたら頻繁に不良に絡まれた上に学校では問題児扱いされたからさ。平和に高校卒業するにはちょっと芝居する必要があったワケよ」

「不良に絡まれる様な事した覚えはないのってこと？」

「ない。でも目がガンとばしまくってる様に見えるらしい」

なんて悲惨な・・・それでよくケンカになるから問題児扱いされたワケか。

「今の学校での俺からじゃ想像もつかないだろ？」

そう言った光ははにかみながらも、学校での笑顔を作った。

「光はいい子だよ」

林檎は笑顔で光を見る。光は拍子抜けして変な顔をしている。

「こんなに優しく笑えるんだもん。性根は曲がってるかもしれないけど」

すると光は林檎の頭を軽くポンポン叩いてため息をついた。

「それはごおも」

テイワズ3

美月が光のタンスを引っかき回してそこから中に服が散らばった。光はその中から適当に選んで拾い、寝間着から着替えた。美月はまだ服を探している。

「自分で片づけろよ」

「わかってるって〜」

それから5分程あさって、しっかりと片付けて美月は出て行った。

「うう〜」

光の足元で渚が呻いている。

光は特に気にすることなく本棚からドイツの歴史について書いてある本を取り出し、ベッドに転がって読み始めた。

光は昔から暇なときが多くてやることなく、ただただ寝ていることがほとんどだったのだが、美月に『暇なら知識を増やせ』とアドバイスを受けてからはこうしているいろんな本を読むようにしている。だが光は学習能力が妙に高く、一回読んだだけでだいたいの内容は覚えてしまう。知識が増えるのに悪い気はしないので、どんどんいろんな本を読むうちに日本以外のモノを読みたくなった。英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、中国語、

韓国語など、たくさんの言語に触れたことで読み書きはだいたい出来るようになった。さすがに本だけでは発音がわからないので会話は出来ないが。

30分くらい経っただろうか。

光がウトウトしていると、近くでうめき声が聞こえてきた。見てみると、渚が体を起こそうとしている。だが体力があまっていないのか、少し体を浮かせたと思ったらすぐにまた床に倒れ込んだ。

「光・・・手・・・貸せ」

「ハイハイ」

めんどくさいがここにいつまでも寝ていられては困るので助けてやることにした。

「いつてえ・・・」

「お前なあゝあんな事言ったら美月が怒るのわかってんだろ？」

渚の向こう見ずな行動にため息をつきながら両手を腰にあてる。

「当たり前だ。わざとだよ。あそこで認めちまったらマジで男物着そつだろ？ああいうのはたまにしか見れないからいいんだよ。常に着てたら見慣れちまう」

そんな事を考えていたのか。

「・・・エロガツパ」

「んだと！？お前こそ鼻血なんか出しやがってムツツリが！！」

今のは頭にきた。

ムツツリと言われて黙っていられるほど光の心は広くはなかった。

「誰がムツツリだハゲカツパ！！！」

「はげてねえ！！ちょっと髪が多いからって調子乗ってんじゃねえぞ女顔！！！」

「俺は男だ！！！」

「オカマ野郎！！！」

「うすらハゲ！！！」

「うすら言つな！！！」

それからほとんどプロレス状態だった。

お互い同じようなことを繰り返し言い合い、しめ技や投げ技を次々

と繰り返していた。

“コッソソ”

いきなり軽く何かかぶつかり合う音がして、ドアが開いた。2人は襟首をつかみ合った格好のまま音のした方を見た。林檎だった。

「あ、ごめんなさい！！盗み聞きするつもりじゃなくて、じゃましちゃ悪いと思ったから・・・」

必死に言い訳を考えているようだが、光は全く聞いていなかった。

林檎が着ているのは、先ほど美月が持って行った光の洋服だった。淡い青のシャツにジーンズ。普段の光と同じ格好だ。

だが、なにもかも違って見えた。男物だからだろうが肩端はもちろん合っていないし、袖からは指先が2センチくらいしか出ていない。丈がやけに長く、太ももにかかっている。ジーンズの裾には小さい足が見える。裾は引きずっていた。

(こんなに違うモンなのか?)

男女の違いを改めて感じ、また顔が火照ってきた。

「あの・・・どおしたんですか・・・？」

(£ x ? # ¥ !!!!!!!!!!!!!)

上目づかいの林檎を見て光は爆発寸前だった。
そこで渚がすかさずフオローする。

「いや、何でもねえよ」

そこで光を見てギョツとした。今まで見たことがないくらいに顔が赤くなっている。

「あ！！えと、ちよつとごめん！！」

渚は急いで光の腕を掴み、部屋から出た。

「オイ光！！しっかりしろ！！！」

渚に肩を揺さぶられてやっと正気に戻った。

「大丈夫かよ。お前そんなに女に免疫なかったっけ？」

「さあ・・・こんな事初めてだからなあ」

「なんだ。そういうことかよ」

渚は1人で納得した顔をした。

「原因があるのか？」

「わかんねえか？特定の女にだけ心拍数が上がる症状といえば？」

「もしかして・・・」

ここでカップパ男が得意げに頷く。

「お前は林檎っちのことが好きなんだよ」

「そう・・・なのか？」

「本当に他の女には興味ねえのか？」

「ああ。この前クラスメイトの女子がすっころんでスカートめくれただけでなんともなかった・・・」

「お前そんなおいしいシチュエーションに遭遇して男の血が騒がな

いなんて珍しい奴だな」

本当に珍しいモノを見るように渚の切れ長の目が上下する。

「男が誰でもお前みたいにエロいと思うなよ」

「いや、男はみんなエロイ。ただ表現方法が違っただけで」

「例えば？」

「そうだな…例えば、オレがその場にいたらガン見する」

「だろうな」

即答する俺を見て気分を害したのか、少し投げやりに続ける。

「他にもチラ見する奴とか、顔真っ赤にして顔そらしたりする奴らがいる」

おお。

なんとなく納得できた気がする。

「お前はその中でも理性が強いタイプなだけさ。ちょっと気にはなるが、理性がそれを隠しちまう」

「そう…か？」

それにはあまり納得がいかない。

首を傾げて眉をひそめると、渚が短いため息を吐いた。

「だからお前はムツツリなんだよ」

「それは違くないか!？」

「いいか？光。お前がこのまま林檎ツチのことを直視出来ない様なことがあつたらお前の命が危ねえ」

確かにそうだ。

一度コンフォーマーに触れてしまった以上、定期的にエネルギー補給が必要になる。

このまま林檎に近寄れなければ、さすがに死ぬことは無いが一生才ムライスが旨いと感じられなくなってしまうだろう。

林檎のそばにずっといるためにも、早く克服せねば……。

(ん？ずっと……？)

そのとき光の頭の中に、まるで映画のワンシーンのような映像が流れた。

綺麗に掃除されたリビング。赤いエプロン姿の女性がご飯が出来上がったことを知らせると、小さな子ども達が足早に駆けつけてき

もの定位置に着く。眠そうな目を擦りながら遅れて入ってきた男性の類に、女性がおはようのキスをする。まだ完全に覚醒はしていないものの、軽く微笑んで女性の頭に手を置き、おはようと返し席に着く。食卓にはツヤツヤしたオムライス。『いただきます』。女性がスプーンを手に取り、男性の目の前にあるオムライスを一口程度すくって男性に差し出す。はにかみながらもそれを口にしますが、照れ隠しに「まあまあだな」と言ってしまう。拗ねて下を向いてしまった女性に慌てて冗談だと告げると、目の前に満面の笑みが咲いた。

「……イイ」

「なにがだよっ!!」

すかさず渚が突っ込んで、ようやく我に返る。

「いいか？林檎ツチの隣にいられる事を喜べ!!可愛すぎて見てられないのはわかるが、もったいないと思わないか？あの子の笑顔をちよっつとでも多く見ていたいだろ？」

「そ……うか。そうだな、見ていたい。……もう逃げないぞ!!」

「おう!!その息だ!!!」

はたから見れば今から探検に行く子ども達のようにだ。拳を突き上げ

て」「おお〜〜!!!!」「と叫んでいる。

「じゃ、行ってくる」

「行ってこい!!!!」

ドアノブに手をかけ、深呼吸をしてから中に入った。

もう逃げないぞ!!!!いくら可愛くたって目を逸らすもんか!!!!

そう意気込んだはいいが、林檎はこっちを見てはいなかった。

先程美月がかき回していったタンスの上を凝視している。のぞき込んでいたので、背伸びしているのだが上半身は下げているという可笑しな体勢だった。

「林檎?どうしたんだ?そんな格好で」

そこにあるのは写真立てとカギつきの箱だが……。
林檎の見つめる先を確認する。

(ああ。あんなところにあったのか)

あれは光自身が選んで買ったものだが、もう必要無い。

「……欲しいならやるよ」

「え！？でも・・・」

林檎が驚いた顔をして振り向いた。

「趣味じゃないから。それにそういうの好きそうだしな、林檎」

するととても嬉しそうに、

「うん。ウサギは大好きだよ」
と笑ってくれた。

その笑顔だ。その笑顔が好きなんだ。
・・・なんだか恥ずかしいな。

「光」

「ん？」

「さつきから変だと思ってたんだけどさ。光、学校にいるときとなんか違うよね。今は可愛い感じしないもん」

突然の予想外すぎる言葉に、顔が火照ってくる。上手く呂律が回らない。

「な！？か、可愛い・・・！？ま、まあ・・・学校の時と素の俺が違うのは事実だよ。中学の時には素でやってただけど、そしたら頻繁に不良に絡まれた上に学校では問題児扱いされてさ。平和に学校卒業するにはちよつと芝居する必要があつた訳よ」

ただ無表情で歩いてただけなのに・・・おかげでいつも微笑みながら歩かなくてはならなくなってしまった。中学の時の知り合いに会ったときは急いで顔を戻していたが、何度か間に合わなかったことがあつた。アイツ等から見たら意味不明な微笑みが逆に恐いらしいが。

「不良に絡まれるようなことした覚えはないのってこと？」

「ない。でも目がガンとばしまくってるように見えるらしい」

高校にも何人か知り合いが入学していて、声をかけられたことがあつた。だが悪い奴らではなかつたので、協力してもらっているのだ。林檎が複雑そうに苦笑いしているのを見て、ぎこちなくではあるが、なんとか学校のキャラとしての笑顔を作ってみた。

「今の学校の俺からじゃ想像もつかないけどな」

すると、思いがけない返答が来た。

「光はいい子だよ」

・・・びっくりした・・・。

なんなんだ？この、小さい子供をあやすような言葉は。

コイツは俺を慰めようとしてるのか？

「こんなに優しく笑えるんだもん。性根は曲がってるかもしれないけど」

・・・違うな。本当にそう思っているんだ。

真っ直ぐに自分に向けられた笑顔には、妙な気遣いなんて一欠片も見当たらなかった。

ほんと、面白いヤツ。

「そりゃどおも」

7 新感覚(前書き)

今回は林檎目線ですが、後半にほんのちよつと性的な描写が含まれています。今後、さらにそういう場面が増えていくと思われまふので、それでもいい!!という方のみお進み下さい。 m | | m

7 新感覚

光は私と目が合うと、すぐに手を離して後ろを向いた。

「光？」

不思議に思ったので顔を覗き込んでみた。

「うわっ！！」

慌てて顔を隠して後ろに下がる。

どう見ても怪しい。

そんなに私と目を合わせたくないのだろうか？

そう考えるとちょっと悲しくなってきた。

そんな私の様子に気づいたのか、すぐに顔を隠すのをやめて私の両肩をつかんだ。

そして軽くひざを曲げ、目線をあわせてジッと見つめ合う。

「な、何？」

「・・・林檎」

心なしかさつきより顔が近いように感じる。

いや。気のせいではない。

確実に近づいてきている。

しかもだんだんと速くなり、あっという間に息がかかるところまできてしまった。

「え？ちよっ、どうかしたの？」

あ、光、まつげ長い……。

それに、いつもの可愛らしい表情じゃないせいか、妙に雄^{オトコ}を感じる。少しうっとりしてしまった。だが、気がつくと、あと数ミリで唇同士が触れあってしまいそうになっていた。光の目は意識がどこかに行ってしまったかのように虚ろになっている。

このままじゃ大事にとっておいたファーストキスが失われてしまう！！

私はとっさに後ずさった。

……が。

そこには後ずさるスペースなどなかった。

何故ならそこには、あのフカフカなダブルベッドがあるのだから。

「……きゅー……」

「のわっ！？」

(押し倒されたああああ！！？?)

「わ、わりい！！周り見てなかった」

どうやらそういう気があるわけではないらしい。

「オレは……その、ただお前を直視出来るように練習を……」

「！？……じゃあ……やっぱり私の顔……見たくないんだ……」

「ち、ちがつー！！」

自分の目から雫が一粒落ちていくのがわかった。声も震えてしまう。

「光、私のこと嫌いなんだ・・・」

「林檎!?!」

2人の額がコツンと音を立てて触れた。

「違う。嫌いになんか、なるもんか。オレは・・・お前のこと!?!」

「・・・?」

その時、ドアが勢いよく開き、1人の女性が部屋に入ってきた。

「朝ご飯できたよぉ・・・お?」

女は口を開けたままベッドの上の2人をまじまじと見た。

小柄な少女が目には涙を浮かべながら怯えたようにベッドに倒れ込んでいる。その上には少女よりも一回り大きな少年が覆い被さって顔を近づけている。

「み・・・美月!?!」

「美月さん!!」

「・・・」

美月は黙ってこちらまで歩いてきて、いきなり光を突き飛ばした。その際、頭を壁に強打。

「な、なにすんだ・・・」

「ヒカちゃん!!!!!!!!!!」

美月は死期を感じるほどの形相で怒鳴り、勢いに圧されて光が床の上に正座した。

「はiiiiiiii!!!!!!!!!!」

「あんたって人は!!!!!!こんなたいけな少女を泣かせて、その上襲うなんて!!!!!!!!!!私はあなたをそんな極悪非道の外道野郎に育てた覚えはありませんよ!!!!!!」

「そこまで言うか!？」

「問答無用じゃああ!?!?!」

「ちょ!?!?!待て　　ブフォ!?!?!」

最後まで言う前に美月の長い脚が光のミゾにクリーンヒットし、先ほど光の頭にタンコブをつくったあの壁に再び頭を強打した。もちろん光の意識は旅に出た。

その後、荒れ狂う美月をなだめるために誤解であることを伝えると、慌てて光をベッドに乗せて救急箱をとってきた。

ふと扉の方を見ると、渚がしゃがみこんで笑いを堪えていた。

「ごちそうさまでしたあ！」

「ゴメンね。スープもパンも冷めちゃって」

「いえ！！いただけるだけで嬉しいです」

光の分は渚が全部食べてしまった。
まあすぐには起きて来そうにないが。

「林檎ちゃん」

「はい」

美月が皿を洗いながらこちらに向く。

「コンフォーマーが何のためにルーンを持つ人のそばに現れるか知ってる？」

「そういえば、なんだっけ？」

「大体みんな生まれ持ったエネルギーを消費し始めるのが思春期あたりで、ルーン所持者はこの頃にコンフォーマーに出会うことが多いの」

「光と私もそうですね」

「うん。ルーン所持者はコンフォーマーに出会うとエネルギーをたくさん取り込むことが可能になるから、自分の持つ能力を自由に使うことが出来るようになる」と聞いたわ」

「え？能力、ですか？」

もしかして光に何か特別な能力が備わっていたりするのだろうか？

「それがどんなものかはまだわからないけど、私はコレ」

そう言うと美月は蛇口から流れ出ている水を手ですくい、目の前の皿に出した。

「え？氷・・・？」

触つてみると、完全に固まってはいないものの、さっきまで水だったとは思えない程に凍っている。

「・・・手品、ですか？」

「これは私の能力なの。本来、人が持つことのない力。ルーン所持者は今だに特殊な能力を使う事が出来るの。昔のルーン所持者はこの能力で戦っていたけれど、今の人達にはそんな強力な力はないんだ。せいぜい手品に見えるくらい」

そう言うと、美月は苦笑いして皿を片づけにキッチンへと戻った。

確かに、これで戦えと言われてもたかがしれている。

神様が造った兵隊さんなのだから当時のルーン所持者が強力な力を持っていてもおかしくはないだろうが、その血が薄れてきているであろう現在にその不思議な力が薄れてしまうというのもまたおかしくはない。

「能力が使えるようになるってことは、それだけエネルギーを使うって事。その失われたエネルギーを補給するためにコンフォーマーがいるのよ」

「補給・・・ですか」

「私は能力を使わなければ2日に一回ぐらいね。光の能力はまだわからないけど・・・2人が出会ってからもう随分経つでしょう？」

「2週間程ですね」

「光のルーンは見たことあるよね。いつ接触したか覚えてる？」

接触・・・そういえば、上向きの矢印テイワスが鎖骨のあたりに浮き上がってきた日から、光は私に近づかなくなった。あの時触れていたっけ・・・？

「・・・心当たりはあります」

「その日からどのぐらい経ってる？」

あれは確か、月曜・・・。

「5日経ってますね」

「・・・え？もしかして・・・ヒカちゃんバテバテ？」

美月の顔がサツと青くなっていく。

「さっき思いっきりフツ飛ばしちゃったよ・・・？ヒカちゃん死んでないよね!？」

あれだけされれば元が元気でも結果は同じだろう・・・などと言えるはずもなく、今朝起床した時の様子を思い出す。そういえば、上に覆い被さっていた・・・疲れている時にあんなド

S 発言で人を苛めようとはしないだろう。

「・・・今朝は元気でしたよ？」

「そうなの！？でも5日なんて・・・それに昨日帰ってくるとき、林檎ちゃんをおんぶして帰ってきたのよ？」

「そうなんですか？」

ここから学校までの距離はわからないが、相当疲れたはずだ。
なぜ今朝はあんなに元気だったのだろうか？

ガチャ。

「んん・・・頭いてえ・・・美月、水くれ　　！？・・・な、
なんだよ」

噂をすれば、だ。

いきなり入ってきた光に2人とも目を大きく開け、ただただガン見。
その視線にうろたえながらも、腰を落としてゆっくりと（カニのよ
うに）壁際を移動する。

「・・・ヒカちゃん」

「は、はい!？」

不穏な空気の中、急いで背筋をピンとのばして美月の目線から逃げるように少し上を見る。

「元気？」

「・・・は？」

「元気・・・？」

「・・・えと・・・はい」

そこで美月と林檎が顔を見合わせる。そして再度光をガン見。

「光、大丈夫なの？」

「何が？」

「そろそろエネルギー切れじゃない？」

「・・・・・・あ」

思い出したように口を開く光。

「いや、それは・・・」

「ああああ!!!」

曖昧な反応の光を見て、わかったと言うように大声を上げる美月。その声に驚いたのか、ビクツと肩を震わせて光が壁に貼り付く。

「な、何でしょうか」

「もしかしてヒカちゃん、林檎ちゃんが寝てる間に　まさか・

・お・・・襲って!？」

「襲ってねえ!!!」

「じゃあなんでそんなにピンピンしてるのよ!!!」

「俺は断じて襲ってなんかないぞ!!!ただちょっとフラツとしたから」

「私、寝込み襲われたんだ・・・」

「うおおおおおい!!!林檎!!!違つぞ!!!確かにちょこつともらったけれども!!!」

思わず白状してしまった光に対し、美月は両手で顔を覆い、悲劇のヒロインのようにつつむいた。

「やっぱりそうなんじゃない!!ヒカちゃんは可愛い寝顔に堪えきれず、林檎ちゃんをつまみ食いしてしまったのよ!!!」

「私はおつまみですか!？」

そして今度は顎に折り曲げた人差し指と親指を当ててどこかの探偵風に目を閉じる。

「そうよ。可愛い顔して実は飢えたオッサンなのよ」

「そこせめて狼って言うてくれない？」

「あなたに決定権はない!!よってオッサン!!!」

「何でだよ!？」

「光は中年ですか!？」

「林檎。素直なのは嬉しいが、コレを真面目に受け取らないでくれ」

「違うの?よかったあ」

ホッと胸を撫で下ろす林檎を見て、探偵風の格好のまま美月が顔をしかめた。

「・・・林檎ちゃんって・・・天然？」

「よ、養殖なんてされてませんよっ」

「「いや、だから違っつて」「」

いつまでも続くトリオ漫才に終止符を打ったのはやはり渚だった。

「・・・楽しそうだな。何の話してんだ？」

「わ、私がおつまみで、光は中年だったんです・・・」

「いや、わかんねえから」

「ヒカちゃんがエネルギー切れだからって林檎ちゃんの寝込み襲ったのよ」

「襲ってねえ」

「・・・林檎ツチのルーンはどこにあるんだ？」

また漫才が始まる前に、渚が話を続ける。
林檎は軽く（元々サイズが大きいので）襟を広げて見せた。

「なるほど・・・光、直接吸ったのか？」

「し、しょうがねえだろ。ギリギリだったんだから」

「んっ・・・確かに直の方が短時間で済むが・・・鎖骨を、直接・・・エロいな」

「なっ！？で、でも途中で林檎が起きたから満タンじゃねえぞ！！」

だから上に乗ってたのか。

思い出したら恥ずかしくなってきた。

「なんだ、満タンじゃねえのか。じゃあもらっとけよ」

その言葉に驚いたのは林檎だ。

今、ここで？

「ん？なあに固まってんだあ？林檎ツチ、もしかして知らないのか？」

「なにをです?」

「別に吸うのは体のどこでもいいんだぞ」

「え、そうなんですか?よかったあ」

「ただ、ルーンに近ければ近いほどすぐ済むって事だよ」

「じゃあ腕とかでも大丈夫なんですか?」

「そ。ほら、やってみな」

長い袖をまくって、なるべくルーンに近い場所を光に差し出す。すると、小さいため息について林檎の右横に片膝をついた。

「いくぞ」

光はそう言つと、薄く目を閉じて林檎の二の腕に口をつける。その瞬間、体の中の何かがゾワゾワと動き出し、ルーンが青くなつていく。

なんだか奇妙な感じ。
背筋がゾクゾクする。

「……んっ……ふぁ……ぁ」

だんだん心拍数があがってくる。

なんだろう。まるで腕に性感体が出来てしまったかのような……。

「終わりだ。林檎？どうした？」

「な、何でもない」

なんというか……精神的に疲れる行為だと思う。

チラリと渚を見てみると、やはり経験者は語る。楽しそうにニヤニヤしていた。

テイワズ4（前書き）

光目線書くのはちょっと大変です。前回の会話と一字一句合わせなければいけないので（-_-”-_-）

でも男の子目線を書いているという点ではウキウキします（。°。°

（ ）（ ）（ ）#

話は変わりますが、いつの間にか“僕の世界。君の世界。”をお気に入り登録してくださっている方がいらっしやいました（ ）（ ）

煌爛は感動しました！！（T^T）

ありがとうございます！！！！！！！！

では久しぶりの投稿ですが、どうぞ！！！！

（つ、*）

ティワズ4

ため息をつきながら頭を軽くポンポンとたたくと、一瞬戸惑った顔をしてから小さく笑った。

今度はさっきとは違い、嬉しそうに、頬をピンク色に染めながら。

カワイイ

そう思ったとたん、さっきまで抑えられていたはずの発作（？）が襲ってきた。

自分の顔が熱を帯びていくのがわかる。

とっさに視界から林檎を消すために後ろを向いたが、不思議に思ったのか、再び林檎が自分の顔を覗いてきた。

「光？」

「うわっ!？」

両手で目を隠し、なんとかまともに見ずにすんだ。

・・・なんだ？ 静かになっ・・・た？

まさか、誤解してるんじゃないか？ 林檎のことだから、今の俺の態度で嫌われてると思ってしまうても不思議じゃない。

そうだ。決めたじゃないか。

少しでも多く林檎の笑顔を見るんだ。

理性を取り戻し、林檎に真っ正面から向き合った。今落ち着いてい

るときに慣れておけば、この先楽かもしれない。
両肩に手を置き、軽くしゃがんで視線を合わせる。
突然の変化に驚いたのか、林檎が顎を引いた。

「な、何？」

「林檎……」

それでも目を逸らさずにしばらく見つめ合っていると、いきなり前に引つ張られた!!……否、バランスを崩して林檎をベッドに押し倒してしまった。どうやら林檎が近づきすぎた顔から逃れようと後ろに下がったようだ。

これじゃあただ襲いかかっているだけじゃないか!!!

「わ、わりい!! 周り見てなかった!!!!」

明らかに動揺しながらも謝ろうとすると、ホッとしたように林檎の肩から力が抜けていくのがわかった。

「オレは……その、ただお前を直視できるように練習を……」

そう言ったとたん、落ち着いていた肩が小さく震え始めた。

「……じゃあ……やっぱり私の事……見たくないんだ」

声も震えて、横に涙が伝っていく。

「ち、ちがつ!!」

「光、私の事嫌いなんだ……」

違う!!

俺は……!!

「林檎!!」

そつと自分の額で林檎の額を打つ。

「違う。嫌いになんか、なるもんか。俺は、お前のこと……!!」

「……?」

バタン!!

「朝ご飯出来たよぉ・・・お？」

・・・え・・・？

・・・ソレは無いでしょ。ここまで来てソレはナイヨ、おねえさん。いや、百歩譲って続きはまた今度って事にしないでもないけどさ。

だって・・・コレだよ？

いくら恋愛経験無くてもこの状況を見て第三者がどう思うかはわかるよ。

・・・案の定だし。

『ひ・・・る・・・ひか、る・・・』

．．．だ．．．れ．．．？

俺の名を呼ぶのは？．．．男の声．．．？

『光！！！！』

俺はここだ．．．ここにいる。

．．．．．なんでそんなに必死なんだよ。

『急げ！！！！早く！！！！！！！！！！』

なんだ？何かあるのか？

何故そんなに急かすんだ。

あなたは・・・ダレなんだ？

『
光！！！！』

「・・・・・・・・・・っん」

なんだか頭が痛い・・・・・・・・主に後頭部が。

そうか、美月に　そりゃ痛いわな。

・・・あ、タンコブ。

久しぶりに夢を見ていた気がする。誰かが叫んでいたような・・・。
まあ、夢なんてそんなものだろう。頭が痛かったから眠りが浅かっただけだ。

なんとか体を起こして周りを見る。

まだ少し冷たさが残った氷枕の横に、救急箱が置いてある。しかし、使った形跡はない。右を見ると目覚まし時計や今読んでいる本を置くための小さな背の高いテーブルに皿があり、おにぎりが二つ乗っていた。

いつもいつもそういう気遣いはありがたいが、それなら最初から殴らないでほしいものだ。
とりあえず一口。

「んむ……………ふっ……………」

やっぱり。

「ミートボール……………相変わらずでけえな」

美月のおにぎりにはミートボールが入ってることが多い。しかも一口で食べるとしゃべれなくなるくらい大きい。

きつと美月は子供の頃、コレを親に作ってもらってたんだろっな。

「……………」

……………食ったらのど乾いてきたな。

降りるか。

美月のやつ、容赦ねえからな。脳しんとう起こしてるんじゃないか？
まったく……。

“ガチャ”

「んん……頭いてえ……美月、水くれ
なんだよ」
！？……な、

リビングに入った途端に視線を感じて顔を上げると、2人の女が自分を凝視していた。
あまりの威圧感に恐怖を感じる。
飲み物を取りに行きたいのだが、背を向けてはいけない気がする。
なんとか四歩程進んだところで呼び止められ、恥ずかしながらビビってしまって声が裏返る。

「……ヒカちゃん」

「は、はい!？」

もしかして、さっきのことだろうか？
いや、林檎が少しは弁解してくれているはずだ。美月の勘違いなのだから。
じゃあなんだ!?

「元気？」

「・・・は？」

「元気・・・？」

これは新手的脅しか何かか!?

「・・・えと・・・はい」

すると、林檎と美月が同時にお互いの顔を見る。
・・・もしや俺がおかしいのか？

「光、大丈夫なの？」

「何が？」

「エネルギー切れじゃないの？」

「・・・」
「あ

そうか、朝堪えきれずにエネルギーをもらった事を言っていなかったのか。

「いや、それは・・・」

すぐに言うべきだった。渚が吸われているのを見たことがあるが、あまり堂々と言える行動ではない。特にコンフォーマーの立場では・・・。

何かを察したのか、美月の目が一瞬見開かれた。

「ああああ！！！」

「な、何でしょうか」

「もしかしてヒカちゃん、林檎ちゃんが寝てる間に
まさか・
・・・お・・・襲って!?!」

とんでもないこと言いやがったああ！！！！

「襲ってねえ！！」

「じゃあなんでそんなにピンピンしてるのよ！！！！！」

なんとか弁解しなければ後々面倒なことになりかねない。必死で言い訳を考えて絞り出した。

「俺は断じて襲ってなんかないぞ！！ただちょっとフラツとしたから」

あ、言っちゃった。

そのとたん、林檎の様子が変わった。眉間にしわが寄っている。

「私、寝込み襲われたんだ・・・」

「うおおおおおい！！！！林檎！！！！違っぞ！！！！確かにちょこっともらったけれども！！！！」

すると美月がわざとらしく（まあわざとなんだろっが）顔を両手で覆い、乱暴にうつむいた。

「やっぱりそうなんじゃない！！ヒカちゃんは可愛い寝顔に堪えきれずに、林檎ちゃんをつまみ食いしてしまったのよ！！！！」

うん、確かに可愛かった。小動物みたいで。

だが、今のは誤解を生む言い方だ。光はコンフォーマーからエネルギーをもらっただけで、その他にいかがわしい事は何一つしていないのだから。

つつこみを入れようと口を開くと、林檎が一瞬速く反応を見せた。しかし、それはまた別の誤解を生んでいるように聞こえてしまう。

「私はおつまみですか!？」

どうやらこの子は物事をにそのまま真に受けてしまっらしい。それをノリと思ったのか、口に指を当てた美月はドラマの探偵の真似をするように声のトーンを落として話す。

「そうよ。可愛い顔して実は飢えたオッサンなのよ」

「そこせめて狼狽って言うてくんない？」

「あなたに決定権はない!! よってオッサン!!!」

「何でだよ!？」

「光は中年ですか!？」

いや、同い年だから。

確かにあたりめとか好きだけど。

「林檎。素直なのは嬉しいが、コレを真面目に受け取らないでくれ」
「違うの？よかったあ」

林檎の頭の中はどうなっているのか疑問に思い始めた時、やっと美月も気づき始めたようで

「……林檎ちゃんって……天然？」

と顔をしかめながら尚も探偵風に口にする。

「よ、養殖なんてされてませんよっ」

「いや、だから違っつて」

……混乱すると深く物事を考えられなくなるらしい。

8 過去と覚醒（前書き）

実は今、出したくて出したくて仕方ないキャラが何人かいます。

まだ名前も容姿も決まっていないような段階ですが、たぶん近いうちに深く関わってくると思います（、ー、（ゞ

8 過去と覚醒

私は美月が運転する車で一旦家に帰り、着替えて一泊分の荷物を持ち再び光達のもとへお邪魔している。

せっかくだから泊まってと誘われたのである。家にいても特にやることなど無いので、甘えさせてもらった。

驚いたのは、お互いの家の距離である。実は一キロもなく、充分歩いて行ける距離だった。

「すみません。車まで出させていただいたのに」

「いいのよ。荷物だってあるんだから」

リビングに入ると、光と渚がテレビに向かって吠えていた。

「コノヤロオ！！！！」

「へ！！悔しかったら一発でも当ててみな！！！！」

「あ！！卑怯だぞ！！爆弾なんて使いやがって！！！！」

「これが卑怯なら最初から設定されてねえよ」

「少しは顔にあった行動しろよ女顔！！」

「女じゃないから関係ないね。はは！！！！お前プレイキャラまでツ

ルンツルンじゃねえか！！！」

「あ！！俺の ツシー様を侮辱しやがったな！！」

どうやらスマ ラをやっているようだ。

「ホントに仲がいいんですね」

「そうなのよ。光が中学一年生の終わり頃から一緒にいるからもう2年ちよつとになるかな」

「それまでは光と美月さんのお二人で？」

「私が光と出会ったのは光が小学5年生の時なの。光が通っていた小学校に研修生として入ったんだ。その時は手袋でアイサーを隠していたんだけど、光にイタズラされてね。手袋を盗られちゃったのよ」

なんてやんちゃな……。

「その時に光の目を間近で初めて見て、テイワズのルーンが浮かんでるのに気づいたんだ。それで、光が小学校を卒業した後に取り返ったの。親戚は数回しか会ったことのない叔父が一人で、他に行くところもなかったしね。んで、この光の家に二人で越してきたんだ」

「光の家？……ここがですか！？」

「光のご両親が建てたんだよ。今はさっき言った叔父の名義になってるけど。成人したら光のモノだよ。渚はその一年くらい後に友達を通して知り合って、すぐに一緒に住むことになったんだ。ちょうど実家出るところだったから」

「ここが光のモノになっちゃうんだ!!!」

驚きすぎて、たった今座ろうとしていた四人掛けのフカフカソファに足をぶつけてしまった。

「・・・あれ？光のご両親って・・・」

そう聞いたとたん、美月の顔が心なしか曇った気がした。

もしかして・・・。

「あの子・・・私が引き取る前は孤児院にいたの。小学校に上がってすぐにご両親が」

「美月」

美月は突然聞こえた低い声に怯えたように、ビクッと肩を震わせて光を見た。

相変わらずテレビ画面に向かっているが、手が止まっている。画面

では、赤い帽子の髭男が黄緑色の生き物に食べられている。

「……ごめんなさい」

「……」短い沈黙のあと、赤帽子が歩く爆弾を黄緑色の生き物に投げつけた。

「あ！？また爆弾投げやがったな！！」

「ボーっとしてるのが悪いんだよ！！」

「ふざけんな！！ ツシーがあと1人になったぞ！？返せ！！今すぐ俺の ツシー様を返しやがれ！！！！」

「そんな機能はございませえん」

「テメエコノヤロオ！！！！」

「……後ろ姿で顔は見えなかったが、きつとすごく怖い顔をしていただろう。」

だが同時に、泣いているんじゃないかとも思った。

光……。

その後も2人は楽しそうにゲームをしている。しかもさっきの出来事が嘘のように、「昼飯はあ？」と子猫のように甘えた声でなんとも可愛い顔をしたりしている。それにつられてか、美月も子供をあやすように「ハイハイ」と言ってキッチンに向かう。

手伝おうとしたが、「お客さんは座ってて」と止められてしまった。1人暇になってしまったので、何となく二人掛けのソファを独占している光の隣に飛び込んだ。

「わっ！？林檎！？」

「失礼」

「失礼じゃねえよ！！びつくりしたあ。もっと広いとこあいてるだろ？」

「だって寒いんだもん」

「ん？寒いのか？」

そう言うとコントローラーを膝に置き、着ているパーカーを肩に掛けてくれた。

「まだ寒いかな？」

実際本当に寒かったわけではなく、一人で座っているのが嫌だっただけなのだ。だが、自然な優しさが嬉しくて、心が温かくなった。

「うん。ありがとう」

「ん」

何故か恥ずかしがっているようだ。微妙な返事のあとは視線を逸らしてゲームに戻ってしまった。

そっか、きっと光は女の子とこうして座ったことがないんだ。

試しにコロンと光の方に倒れて肩に頭を乗せる形になる。

すると、赤帽子がジャンプを止めてマグマに落ちた。何回か飛び跳ねたあと、なんとかしてステージに戻る。

「さ……寒いのかな？」

「うん。寒いよ」

「……そ」

今度は、一旦体を起こして光にぴったりとくっつく。そして表情を

見ることが出来るように顔を覗き込んだ。

ガシャン！！！

コントローラーの落ちる音だ。

光はそのままの格好で固まってしまった。顔は真っ赤になって瞬きするのも忘れてしまったようだ。

腕が宙に留まっているので、ちょっとつついてみた。全く反応がない。

・・・面白い。

スマ ラよりも遙かに楽しい。

気が済んだので、最初に座った位置に体を戻した。

やっと頭が再起動したようで、慌ててコントローラーを拾い上げる。

「光っていじりがあるよね」

「林檎・・・俺で、遊んでたのか？」

光はなんだか不機嫌そうな声で、下を向いたままゆっくりと立ち上がった。

「へえ・・・この俺で、遊んでた。・・・ふん？」

ん？何だろう・・・？光から発せられるオーラがだんだん黒くなっ

ていくような・・・いや、実際には見えてないけどね。

「俺を・・・玩具に、ねえ？」

「えつと・・・怒ってるの？」

不安になって恐々聞いてみたが、間違いだったようだ。

次の瞬間、満面の笑みを貼り付けた光の顔がこちらに向いた。・・・
なんかいやな予感。

「ぜえんぜん 林檎が楽しめたんなら俺も嬉しいよ？ で

も、ね？」

「な、なあに？」

明らかに学校での光の口調である。しかし言葉は可愛くても、中身は多分、林檎が知らない彼だ。

「さっきは林檎が楽しんだんだろ？じゃあ今度は
」

光はそう言いながら近寄って、私をソファアの隅まで追い詰め、覆い被さる。

そして、少し乱暴にアゴを持ち上げられ、耳元に唇を寄せる。

「俺、だよな・・・？」

「ストーツツプ！！！！」

突然、目の前が明るくなった。

見ると、渚が光を羽交い締めになっている。光はなにが起こったかわかっていないようで、目をパチクリさせていた。

「何だよ」

自分あまり良い格好ではない事に気づいて渚をにらみつけるが、そんなことはお構いなしに渚は続ける。

「ここはマズいっしょ。やるんなら部屋でお願いしますよ、先輩」

そこで光が慌ててキッチンの方を見る。美月は全く気づいていないようで、黙々と作業を続けている。しかし、それでも光の頭を正気に戻すのには十分だったようだ。顔からはだんだんと血の気が引いていき、口はワナワナと震えている。

「あ・・・林檎・・・ごめん！！！！」

どうしたらよいのだろうか？

目の前で光がこちらに向かって土下座をしている。
さっきの光との変わりように、ただただ光を見下ろすことしか出来
なかった。

「悪気があったわけじゃないんだ！！その・・・何だか突然、苛め
たくなって・・・」

「い、いじ・・・？」

「そうか、光はドSだったのか・・・」

渚を見ると、納得した顔で頷いていた。

「・・・悪いかよ」

「いや？男はちよつとくらいSじゃないとやっくらんねえからな」

「おまえさっき“ド”って言ったよな」

「ん〜。俺は“ド”ではないが・・・いや、気持ちはわかるぞ？い
やでも“ド”ではないからなあ」

「結局ドSに引いてんじゃねえか！..」

「引いちゃいないさ。女の子弄るのは嬉しいよなあ？いやでも“ド
”じゃ」

「てめえは黙ってる!!」

「ん?“てめえ”?“てめえ”って誰のことかなあ?“ド”S君」

「ドSはてめえだああああ!!!!!!」

・・・結局ドSvsドSの漫才が始まってしまい、林檎は“ドS”についてつつこむ機会を失ってしまった。

四人でミートスパゲッティを食べている時も光はイライラしているようで、何も言わずにももの数分で完食し、再びソファーに深く座り込んだ。

渚は渚で、ニヤニヤと光の様子を観察している。

状況が読めないらしく、美月が小声で問いかけてきた。

「ねえ・・・何かあったの?」

「渚さんに“ドS”と言われたのがイヤだったみたいです」

「え?ヒカちゃんが“ドS”?・・・なんで?」

すると、渚が面白そうに説明を始めた。

「いやあ、それがなあ。ひ、光のヤツ・・・ククッ」

「一人で笑ってちゃ分かんないわよ」

「さつき林檎ツチにオモチャにされたのが気に入らなかつたのか知んねえけど、スイツチ入つてよお・・・クツ」

思い出し笑いのせいで先が言えないようだ。

自分もあまりハッキリとはわかっていないが、そのときの状況だけ伝えておこう。

「いきなり光からドス黒いオーラが放出されて、私に迫ってきたんです」

カラッ

美月の手からフォークが皿の上に滑り落ちた。

「・・・迫ってきた？どんな風に？」

すると、渚がおもむろに美月に顔を近づけ、顎をグイッと持ち上げてこう言った。

「『さつきは林檎が楽しんだら？じゃあ今度は・・・俺、だよな？』って」

妙に色っぽい声色だ。たぶんあの時の光のマネだろうが、そこまでわざとらしくはなかったと思う。

そのせいか美月は高まりかけていた怒りを忘れて頬を紅く染めた。

「そ、それで？どうなったの？」

「俺が止めた。だってここで始められちゃったら困るだろ？」

「そっか、止めたんだ。なら、よかった。わかったからちょっと離れて・・・」

「ん？なんで？」

「な、なんでって！？それは・・・だから・・・」

あなたの方こそ“始めそう”だ。完全にこの状況を楽しんでいる。美月はまともに渚の顔を視ることができずに目を泳がせるし、渚の方は少し顔を傾けてこれでもかというくらいに近づいていく。

「ヒカちゃんの再現は理解できたから!!」

「うん、それで？」

「な、なんでまだ近づいてくんのよ!!--」

「さあ？・・・なんでだと思っ？」

うん。

光と渚はレベルが2つくらい違うな。

光は突発的なものだったが、これは理性と相談した上での行動だから夕チが悪そうだ。

9 平和な日々(前書き)

ちよつとだけ光が“DS”モードに突入します。

9 平和な日々

とりあえず邪魔をしないように小声で「ごちそおさまあ・・・」とささやき、キッチンに使った食器を持って行く。なるべく音を立てないようにソファーに座ると、光が怪訝そうに見てきた。

「・・・おい」

「なあに？」

「何でそんなに離れて座るんだ」

「“DS”らしいから？」

なんとなく隣に座ってはいけないような気がするのだ。

様子をつかがうと、あからさまにシヨックを受けた顔をしているではないか。なんだかこちらが焦ってきた。

慌てて光に駆け寄り、右隣に座る。

ん？

なんか光が笑ってる・・・ニコニコしているというよりは・・・勝ち誇ってニヤリ、みたいな。

あれ？ やつちやつた？

「いい子だ・・・」

そう言っつて私の後ろから背もたれに手をかけ、左手で顎のラインを撫で始めた。

大変だ。また“ドS”モードに突入してしまったらしい。

逃げようとしたが逆にソファアに押し付けられ、更に危険な体勢へと持っつて行かれた。上に乗られたのだ。

光は尚も耳や頬を撫でてくる。とてもくすぐったくて右に顔を背けると、そのまま光の指がゆっくりと下へ降りていく。鎖骨のあたりを右へ左へと優しく撫でられだんだんと危機感が薄れて、替わりに自分のモノとは思えない甘い吐息が漏れ始めた。

「……んっ、やぁ……ふ……」

光はまだ愉しそつに顔を歪めたままだ。

今度は顔を私の首筋に寄せると……

ぺろっ

「ひっ……!!??な、舐めた!??」

「へえ……そんな反応すんだ。……フフツ……驚いた?」

「そりゃ驚くよ!!ほら、もう気が済んだでしょ!!そこどいて!

!!!」

「……やだ」

・・・今、なんて？
やだっって言っただ？

「こんなに楽しいこと、そうそうないよ？」

「いやいやいやいや！！あるってば！！！！さっきやったゲームの方が楽しいよ！？やる！！ね！」

必死の説得。

段々と光のイメージが崩れていく。まあ元々学校の光は光ではなかったわけだから、まだほとんど本当の光を知らないのだが。少なくともこんなに強引だとは思わなかった。

「ゲーム・・・？」

なにやら考えているようだ。

一度体を離してテレビ画面を見つめ始めた。その隙に体を起こし、急いで座り直す。

光はというと、何故かうずうずしている様子で落ち着かないようだ。10秒ほどそうしていると、いきなり立ち上がって叫び始めた。

「オル、アア！！！！渚あ！！！！続きやんぞお！！！！！！！！」

・・・一体なんなんだこの人は。

美月はまだ顔が赤いようだが、食器を片づけるために立ち上がるところのようで、テーブルに手をつけて半立ち状態だった。その横で渚が椅子を傾けて座っている。2人とも驚いてこちら・・・いや、光を凝視しているが、動こうとはしない。

「げ・え・む！！早く来い！！」

その言葉にムツとしてブツブツ文句を言いながらも、渚がゆっくり歩いてきてカーペットの上にどっかりと座る。

「なんでそんなにテンション高えんだよ」

「楽しいゲームの時間だからだ」

「・・・素直なこつて・・・」

これは・・・本当にゲームの方が楽しいと判断したのだろうか。それはそれで失礼だが、とりあえず安心して良さそうだ。所詮は15歳。最近まで中学生だったのだ。男の子とはこんなものだろう。

「林檎。見てろよ。俺はこんな奴には負けねえからな」

「・・・渚さん頑張ってる」

「え？」

「おうよ！！こんなガキには負けてらんねえぜ！」

「なんだよそれ！！俺は！？」

「ガンバレエ〜」

「うわっ、絶対応援する気ないだろ！！お前も笑ってんじゃねえよ！！」

本当に平和な1日だ。

平和な休日をごすと、周りよりも少し大きな家の前に1人佇む男がいる。

フードを深くかぶり両手をポケットに入れている。

「……肴山……光

」

そう小さくつぶやくと、裂けるように口角を上げ狂喜して目を見開く。

「みいつけた……」

10 奇人、賭け引き（前書き）

林檎の周りにいるユニークな人々が登場します。
この間に光が何をしていったのかは、次のお話で
（^^）
/

10 奇人、賭け引き

「行つてきまあす!!」

「待つてよ林檎!!置いてかないでよ!!」

バタバタと靴を履きながらこちらに向かつてくるのは二歳上の兄、
柚樹だ。

ハードワックスで持ち上げられた髪は、襟足と前髪の一握り程を金色に染めているが、受験があるのでもうすぐ黒染めをする予定だ。こんな成りでも成績は良く、やる気さえあれば大抵の国立大は彼の席を用意するだろう。しかし、柚樹が受験するのは調理師の専門学校。パティシエになってその名を世界中にとどろかせるんだそう。そんな真っ直ぐでわかりやすい夢を持っているからだろうか、柚樹は校内でも1・2を争うモテっぷりである。所謂イケメンの類で、少々自己愛の強いところは顔でカバーされているようだ。だが、高校に入つて一度も女の子からの告白を受け入れたことはない。何故なら彼には、中学時代から付き合っている女の子がいるからだ。学校が別々になつても、2人の仲の良さは変わらないようだった。林檎も彼女の事が気に入っていたし、可愛がつてもらっている。2人のその関係は嬉しいものだった。

「なんで待つてなきやいけないの?柚樹いっつもギリギリで登校するくせに」

「今日は早く起きたじゃんか」

「なにか予定があるの?」

「何言ってるんだ。お前が昨日朝帰り・・・じゃなくて夕帰りなんかしたからお兄ちゃん心配してるの!」

「だからあ、友達の家泊まりに行ってたって言ったでしょ!」

「ウソつけ!! 母さんは彼氏がどうか叫んでたぞ!!」

「そんなこと言ってたの!」

母は子供っぽいところのある人で、こういう恋愛系統の話が大好きだ。そういえば着替えを取りに戻った時、そんな事を言っではしゃいでいたかもしれない。

「彼氏じゃなくて、友達!!」

「お兄ちゃんはお前をたぶらかす不躰な男から林檎を守るために、これからはらく一緒に登校することにしました」

「人の話聞いてる?」

「ハッハッハッハッハッ!!!! どんからでもかかってこい小童めえ!!!!!!」

「柚樹!! 恥ずかしいから道のと真ん中で叫ぶのやめて!!!!」

柚樹はこの通り、シスコンである。

「……はあ」

「どうしたの？林檎」

「うん……子をあやすってこつこつことなんだろうね……」

「なんか貫禄出てるよ？」

「……はあ」

前の席に座る松下^{まつした} 早恵^{さえ}は、入学以来一番気の合う子である。
兄の奇行をフォローする事に疲れ切って倒れ込むように席に座った
林檎を見ると、早恵はのんびりと近づいてきた。

「噂のイケメン兄貴の事かな？」

「人目をはばからず叫び出す奇人の事です」

「今朝は叫んだんだね」

「……今日から送り迎えする気らしいよ」

「想われてんねえ」

正直やめてほしい。先程本人にもそう告げたのだが、そんなことはお構いなしなのだ。というか聞こえていない。

なんとか教室までついてくるのはやめさせたが、去り際に何か不吉なことを言っていたような気がする。逃げるように教室に向かったので聞こえなかったが。

今日も光は遅刻のようだ。

ホームルームの時間になっても来る気配はない。

一限目にも光は来なかった。

しかし一限終了後の10分休憩に窓際で早恵とイケメン芸能人について談笑していると、近くにいた女子が外に何かを見つけて呟いた。

「あ、肴山君来た」

本当だ。

門のところでは誰かと話している。すごく背の高い、細マッチョな男の子。他校の生徒のようで、ここ東林高校のものよりも少し暗めな藍色の制服を着崩していた。遠目でもある程度モテそうなのがわかる。

「なんか可愛い人だねえ。あんなに笑顔で手え振ってるよ」

「・・・そうだね」

去り際に光が少し手を振りながら何か言ったようだ。光はそのまま学校へと歩みを進めたが、男の子はポカんと口を開けて立ち尽くしている。数秒間そうした後、頬をピンク色に染めて頭を掻きながら去っていった。

「・・・え？光、何言っただの？」

「さぁ・・・？なんだろう。イケメンを赤面させる一言・・・気になるね」

そう言っただけで早恵はニヤリと笑った。

チャイムが鳴ると同時に日本史担当のふくよかな女教師が入ってきた。

「まったくもう。どれだけ遅刻すれば気が済むのよ。日本史だけじゃないわ。他の教科も、出席足りなくなるわよ？」

誰と話しているのかと先生の後に続いて教室に入ってきた人を確認する。

「ホントすみません！でも美奈子ちゃん先生の授業に間に合っ
てよかったあ。今日もよろしくお願いしまあす！！」

・・・光だ。

持ち前の可愛さで先生のご機嫌を取るつもりらしい。コレが毎回成
功してしまうから恐ろしい。

「え、ええ。まあ、次から気をつけてくれればいいのか？明日は早
く起きなさいね」

「はあい！！」

本当に昨日の光と同一人物だろうか？

昨日は（渚を挑発する時以外は）微笑むくらいだったのに、今の光
は満面の笑みだ。

みんなに挨拶しながら席に着いてこちらを向いた。

「おはよう、林檎！！」

「おっおはよう・・・」

昨日の光とのギャップが激しくて、軽く吹き出してしまった。

それを見た光は満面の笑みを貼り付けて林檎の耳元でささやいた。

「あんまり笑ってつと弄り倒すぞ？」

「……すみませんでした」

訂正しておこうと思う。これは間違いなく光だ。

二限目が終了した。

光は相変わらずの笑みを浮かべている。

「光」

「ん？」

「さっき門のところで一緒にいた人、お友達？」

「ああ……後で言っよ」

あれ？

「ああ」って言った時一瞬だけ地獄の底を見てきたみたいなお顔になったような気が……。

「中学の時に知り合ってたんだ」

光の目が何かを訴えている。

・・・そうか、不良扱いされていた時の知り合いなのか。
ここでは説明しづらいたいらしい。

「そっか」

「うん」

「林檎……？早く行かないと遅れるよお？」

早恵が教科書を振りながら自分を呼んでいる。

「ごめん！！今いく！！光も早くきなよ？」

「うん」

なんだか今日の光は疲れているように見える。だけどなんだか嬉しそうだ。

さらに昼休みの時間になると予定があるのか、時計を気にし始めた。そして情報通の早恵に近寄って問いつめている。

「まっつん」

「なにか？」

「今日って何時ぐらいに終わるかなあ？」

「先生が予定ありそうだったからホームルームはあんまりしないだろうね。明日行事ないし。うーん・・・三時半くらいじゃないかな？」

「そっか。ありがと、まっつん！！！！」

「いえいえ。・・・誰かと遊ぶ約束でもしてんの？例えば、今朝の元気君とか」

「元気君・・・？」

「他校の男子生徒と一緒にいたろ？」

「あ・・・うん。そんなとこ」

なんだか言葉に詰まっている。早恵は勘がいいから、いろいろと気づかれそうで怖いのだろう。

「よっぽど仲が良いんだねえ。学校まで送ってくれるなんて」

「いや、あれは・・・ただついて来ちゃったというか・・・」

「ほう。肴山が送れって言ったんじゃないわけだ。じゃああの人にとても大事にされてるってことか」

「なんでそうなるんだよ」

「だってさ。わざわざ他校の友達を学校まで送ってくれる人なんてなかなかないよ？」

「だから、あいつは学校サボってて暇だから・・・」

「暇があつたら会いに来ちゃう仲か」

「・・・何が言いたいのかな？」

あああ・・・光の笑顔がヒクヒクしている・・・。

あんまりイジメると“DS”モード入っちゃうからやめた方がいいよ・・・なんて言ったら今度は私が光に殺られてしまいそうなので言わない。

「知らないだろうけど、あんたが去り際に手を振り返してなんか一言呟いたとき、あの人ほったピンクにして帰ってたよ？」

「・・・は？」

「何言ったか思い出してみな」

「えっと・・・電話する、って言ったただけだったと思うけど」

「あの人に電話したことは？」

「ないよ？」

「へえ？初めての電話が嬉しかったのかねえ？」

そこで光がピタリと動きを止め、少し考えた後納得したように頷いた。

「あいつの場合はありえるな・・・友達欲しくてたまないみたいだったから」

・・・どうやら見た目とは全く違う内面を持った人らしい。

他校の男子と放課後に会うと聞いたときはまた絡まれたのかと思っただが、案外平和な約束のようで安心した。

「人が寄ってきそうなキャラに見えるけどなあ？」

「うん。周りにはいっぱいいるんだけど・・・なんか、自分が認めた男以外は友達って呼ばないみたいだよ」

「・・・硬派な奴だな。で、肴山は認められたわけだ？」

「え？ああ・・・うん。そうみたいだね」

「ほう。この“シヨタ系”を“漢”（いん）と？」

ヤバイ。

このままでは光が爆発してしまう！！

「あ、そつだ！！光！！！！ジューズ奢つてよ！！早くしないと昼休み終わっちゃう！！ゴメン早恵！！先ご飯食べちゃって！！！！」

そう言つて光の首根っこを鷲掴みにした。

急いで早恵から光を引き離さなければ、お互いに大変なことが起る。

私達はそのまま体育館裏まで走りつづけた。

テイワズ5（前書き）

愉快的仲間達追加です（＾　＾　）ノ

テイワズ5

『光!!!』

………またアンタか。

なんだ。

何故俺の名を呼ぶ……？

『これ以上は無理だ!!!行け!!!俺達が時間を稼ぐ!!!』

『いや!!!私もここに』

』

『バカ野郎!!!早くそいつを安全なところに!!!』

なんの話をしてるんだ？

ここはどこだ。何故暗いんだ。

何を急いでる？

何故地面が揺れてる？

俺は何故こんなにも苦しいんだ？

『・・・必ず戻ってくるわ。待ってて！！！！』

みんな叫んでる。

近くからも、遠くからも聞こえてくる。

さらに揺れが大きくなると、声達は遠ざかっていった。

ただ一つ、細く荒い息づかいを残して。

“ピピピピピ”

「ヒカちゃんあ〜ん！！目覚まし時計鳴ってるよあ〜！！一回目だよ
〜！！！！」

遠くで美月が叫んでいる。

そうか、一つ目には気がつかなかったのか。昨日は夜更かししたからな。

林檎が夕方に帰ってから渚にからかわれて、いつも通り取っ組み合
いして・・・美月に吹っ飛ばされて。

夜中は渚と反省会・・・という名の呑み会。（お酒は二十歳をす
ぎてから！！）

二日酔いのせいか頭が痛い、早く起きなければ美月がうるさいの
でとりあえず着替える。ネクタイを首にかけたら洗面所へ向かい、
支度をすませて朝食を食べ始めた。

「ヒカちゃん、なんかイライラしてない？」

「・・・なんで」

「眉間にシワ寄ってるよ？」

「・・・別に」

心配そうに顔をのぞき込む美月だが、あまり話したくはなかった。

確かにイラついている。

最近妙な夢を見るのだ。その夢を見た朝は心臓が潰れそうなほどに悲しく、不安になる。その度にタンスの上の小箱を見る。そうすると少し落ち着いて、やっとベッドを出られる。

夢は人の感情を素直にあらわすと聞くが、あの夢は何なのか。考えようとするが、何故かそれが怖い。

考えたくない。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

「うん」

何かを察したのか、それ以上は聞かないでいてくれるようだ。美月は近くにある私立の小学校の教師をしている。だからなのか、子供たちでもないのにたまに見せる表情はまるで本当の母親のようだ。

「……母親……か」

ある日目が覚めると、そこは小さい孤児院だった。

俺は両親を捜そうとしたが、院長や先生達は外に出してくれない。理由を聞くと、「危ないから」と言うだけ。仕方なく両親の事を聞いてみると、困ったように黙ってしまう。しかしあまりにも俺がしつこいので、院長は二人っきりの時に教えてくれた。その手に持っていたのは新聞。それを広げて一枚の写真が載っているのを指差す。

「あなたのお母様とお父様はね、悪い人に襲われて亡くなってしまったの。光君はお兄さんだから、この意味分かるわね？」

ああ、分かるぞ。
今なら。

当時の自分は、なんで？と思うばかりで、泣くことしかできなかった。

パパとママは悪いことなんてしてないよ。
なんで会えないの？

ボクがいい子にしてなかったから？
じゃあもういけないことしない。
イタズラだってしないよ。

だから・・・パパとママを返して。

・・・帰ってくるわけじゃないじゃないか。
殺されたんだ。もう二人はいない。
いい子にしてたって、意味はない。殺人者はそんなの関係なく二人を殺しただろう。

森の中の開けた場所で、五人の遺体が発見された。全員に刃物で切りつけられたらしい傷が身体中から見つかったが、特に二人は、顔では身元がわからない程だったと言う。

何の意図があつてそうしたのかはわからない。そいつは捕まらなかった。まだ時効ではないが、これだけ時間がたっているんだ。もう捕まることはないだろう。

光は無意識に右手を固く握りしめていた。

「
つ!?!」

突然背筋に突き刺さるような殺気感じて、後ろを振り向いた。

誰もいない。

気のせいだと思いついてまた足を踏み出そうとしたその時。

「よう、元気そうじゃねえか」

目の前に十数人の男達が飛び出してきた。

他校の男子生徒のようだ。殺気は感じない。

「久しぶりだなあ!!俺達、覚えてるか？」

「・・・誰」

全く覚えていなかった。だが身に覚えはある。・・・ありすぎるほどに。

「誰だつて!?!ヶ月くれえしかたつてねえのに覚えてねえつて? 元南中のトップ、坂下 南だ!?!」

「南中の・・・南・・・それつてダジャレ」

「言つなあああ!?!?!?!?!」

「バカヤロオ!?!坂下さんは真剣に悩んでんだあ!?!」

「名前のことでどれだけ苦しめられたことか!?!」

「・・・知らねえよ」

「知らねえはずねえだろ!?!?前に会った時にも言つたじゃないか
あああ!?!?!?!」

「だから、覚えてないんだけど」

「いや、いいんだ。コイツはそういう奴なんだ。人をいじめた上に
見下してあざ笑ひ、涼しい顔して去っていくんだ!?!だから俺は
おまえが嫌いだ!?!」

最後の決め台詞だったらしく、ピシッと光を指差して泣き始めた。

「誰がいつあざ笑った」

「この期に及んで貴様というヤツは!!」

「学校遅れるんだけど」

「おのれ!!坂下さんよりも学校が大事なのかお前は!!」

「だから、誰だよ坂下って」

「うわああああん!!!!」

「坂下さああああん!!!!!!!!」

なんだかとてもなくめんどくさい。
もう行っていいだろうか。

「さすがだな・・・東中の猫目・・・この俺をここまで拉ひぐとは・・・」

そういえばそんな呼ばれ方をしていたかもしれない。中学の時に他校の奴らに絡まれまくったおかげで、変な通り名がついてしまった。仲が良かった奴に聞くと、文字通り猫のような目で人を睨む東中の生徒という意味らしい。

たぶんコイツも中学の時に俺に絡んできて返り討ちにした奴の1人だろう。

「坂下さん、拉ぐってなんですか？」

「・・・知らん。どっかで聞いたのだ」

うん、アホなんだな。

「・・・勢いをそぐ。または押しつぶすって意味だよ」

「なんだお前！？さては頭がいいな！！！！だから俺様をいじめて見下して、あ、あざ笑っ・・・うう」

「マジめんどくさい。お前」

「や、やっぱりそうなんだな！！そうやって楽しんでるんだ！！！！ま、待て！！行くな！！！！」

この時間だともう遅刻だな。
また林檎に怒られる。

“ガシッ”

「!?!」

坂下 南が最終手段に出たようだ。

光よりも頭一つ分大きい坂下に首を取られ、持ち上げられた。

「俺は仕返しに来たんだぞ？黙って帰すかよ」

「んっ……くっ!!」

思いきり肘鉄を食らわしてやった。

すると思っただより効いたらしく後ろ向きに吹っ飛んだ後、子分達の群に突っ込んだ。

「……え？」

よろける程度だろうと思っていたので、拍子抜けしてしまった。

今までの経験では腹を抱えて倒れ込む奴はいても、何メートルにもわたって衝撃が続いた奴はいなかった。

坂下達も予想外だったらしく、目を見開いてこちらを見ている。

「ね、猫目……どこで修行してきたんだ」

「っしてねえよ」

「じゃあ何だ！！脳ある鷹はつてヤツか！？実はオレなんか指一本でひねり潰せるとかか！？」

「なんでそんな興奮してんだ」

「・・・お前　　友達をほしくはないか？」

「・・・は？」

お願いだから日本語をしゃべってくれ。
話に脈絡がなさすぎる。

「お前！！坂下さんが聞いてるんだぞ！！返事をしろ！！」

「じゃあお前達は今コイツが何考えてるかわかるか？」

「・・・さ、坂下さんは宇宙のような人なんだ！！」

「・・・」

光の中で不思議人物となりつつある当人は、じつと光を見つめてくる。その姿は、まるで試験の結果発表を待っている少年。今か今かと心配そうに震えていた。

「なんなんだ・・・」

何がしたいんだ？コイツは。

さっきまで仕返しがどうとか言っていたくせに、いきなり遠回しな友達発言。

実はオレ、ヤバめなヤツの地雷踏んだのか？

「・・・よくわからないからイヤだ」

なんだか逃げ出したくなったので、そう言って学校に向かって駆け出した。

こうすればとりあえずは離れてくれると思ったからだ。

しかし、甘かった。

数秒もしない内に、後方から何かがものすごいスピードで近づいてくる音がした。
まさかと思って恐る恐る振り返ると、鬼の形相の坂下がすぐ後ろに迫っていた。

「ひっ！」

「待てゴルアアア！！！！」

「じゃあそつちが止まれよ！！！！」

「わかった」・・・ホントに止まってるし。

なんだ？怒ってるのか？
じゃあ何故止まる。

・・・意味がわからねえ！！！！

「よくわからないと言ったな？」

「あ、ああ」

「じゃあ説明してやる」

「・・・どおぞ」

「オレは自分が認めた男のことしか友達と呼ばないことにしている」

「・・・はあ」

「お前は見ての通り、男らしい顔をしていない」

「あゝ？」

・・・殴っていいのかな。

「だが、そこらへんの悪ガキなんかとは段違いに強いと見た。オレはそんなお前に男気を感じた。そしてオレの認めるべき野郎だと確信した」

「……そりゃどおも」

「だから友達と呼びたい」

なんだか筋が通っている分、さらに子供に誘われているような気がしてくる。

めんどくさい事に変わりはないが、とりあえず悪いヤツではなさそうだ。

一つ小さいため息をついて、仁王立ちでピクピクしている坂下を座らせた。地べたに。

「言いたいことはよくわかった。でも、俺と友達になったところで得なんて何もないだろ？」

「ある！！友達が增える！！」

「……そうか、お前の頭の造りが何となくわかってきたよ。……まあ、拒否する理由もないから」

そう言ったとたん、坂下の瞳が輝きだした。

「……えつと……はあ……。好きにしな」

「好きにしているのか!?!」

「・・・え」

「じ、じゃあじゃあ！！！親友！！親友はどうだ！！！」

・・・コイツの中身は小学生なんだろうか。

親友って、「今から俺達は親友です」って言ってなるもんじゃないと思う・・・。

「・・・好きにしろ」

「聞いたか！？今の！！オレは親友が出来たぞ！！！！」

「やりましたね！！坂下さん！！」

どうでもいいが、俺はいつになったら学校に行けるんだろう。

ティワズ6

「・・・」

「でな！！あんパンとクリームパンで迷ったからさ、コイン投げて表が出たらあんパンにして、裏が出たらクリームパンにしようと思つて軽く上に投げたんだよ。そしたらつかみそこなつて柵の下に入つちまつてよお！！アハハ！！ウケるだろお？」

「・・・うん」

どうしてついでくるんだろう。

そして何故そんなに楽しそうなんだろうか。

俺は大した反応はしていないのに、コイツはずっとはしゃぎまくつて身振り手振りを加えながら話し続ける。

よっぽど友達が欲しかったんだろうか？

あ、「親友」だっけ。

親友同士話すんだと言って子分達は帰ってしまったから、今は「親友」と二人きりだ。

「そっぴゃあ、なんて呼べばいいんだ？」

「ん？」

「ずっと“猫目”じゃ味気ないだろ？っていうかお前、本名なんだ

っけ？」

「・・・肴山 光」

知らないで奇襲かけたのかよ。

坂下は何やら考え込んだ後、光を見下ろして呟いた。

「コウちゃん」

「・・・？」

「ひかる」ってコレだろ？」

そう言いながら地面に文字を書き始めた。“光”と書いてある。

「そうだけど？」

「コレって“こう”とも読めるだろ？名字の最初も“肴^{じょう}”だし。それに、なんか小動物ツポイから、“ちゃん”付けしてみた。合わせで“コウちゃん”」

「“ちゃん”の部分に納得出来ないんだけど」

「だって幼なじみってあだ名に“ちゃん”付けて呼ぶのが王道だろ！？」

「あれ？親友どこいった？」

「いいじゃねえか。堅いこと言うなよお」

何が堅いものか。小動物ツポイなんて言われて光が喜べるはずがない。ただでさえ女顔で悩んでいるのだから。

「よしっ！！決定！！コウちゃん！！」

「……勝手に決めるなよ」

……聞こえていないんだろうか。それともただ強引なだけなんだろうか。

光の主張は無視されて、勝手に話が進みだした。

「じゃあオレの事はなんて呼びたいんだ？」

「……名前と南中をかけて“南”^{みなみ}」

「……それは仕返しか？マジで泣くぞ？」

「泣けよ」

「コウちゃんのバカヤロオオオオオ！！！！」

「叫ぶな!!!」

「ところでコウちゃん」

「え?」

唐突に泣き顔から笑顔に切り替わる。

・・・百面相?

「今どこに向かっているんだ?」

「・・・学校」

「何!?!」

相当驚いたようで、立ち止まってこちらを指さして震えている。

「あの悪魔の巢に乗り込む気か!?!」

「お前学校で何があったんだよ」

「あれは授業という名の拷問を数時間にもわたって繰り返される巨大な箱だぞ!!!」

「要するに勉強が嫌いなんだな」

「好きそうに見えるか？」

「全然。……俺も授業自体は嫌いだけど、学校は好きだ」光は好きな時間に、しかも気が向いた時にしか勉強はしない。いつも気まぐれなのだ。だから学校の授業は退屈で、寝ていることが多い。しかし休み時間になると、クラスメイトとの何気ない会話が始まる。中学の時には数人の男子としか話していなかったのが、今ではみんなが話しかけてくれるのだ。もちろん、素の光では誰も寄ってきてくれない。教師すらも。まがい物でも、やっぱり嬉しい。だから遅刻はしても、欠席はしないのだった。

「おっ？」

「何だよ」

「初めてコウちゃんの笑った顔見たぞ！！なんかレアっぽいな！！写メっていいか？」

「ふざけんな！！」

やっと着いた。
もう一限目が終わる頃だな。

「学校って何時に終わるんだ？」

「ん〜・・・四時前くらいじゃないか？・・・なんでそんなこと聞くんだよ」

すると、勢いよく右拳を突き出して親指をピンと立てた。

「遊ぼっぜ！ー！ー！」

「・・・は？」

「コウちゃん家行ってもいいか？」

「やだ」

「じゃあ俺んち来い！ー！」

「なんで」

「なんでって・・・ゲームでもしようじゃないか！ー！スマ ラとか」

「・・・家で出来るからいい」

そう言ったとたん、泣きそうな目で光を見つめてきた。

「だあ〜っもおー！わかったよ！ー！ちよつとだけだぞー！」

「マジか！？」

「マジだよ！ー！だから今は帰れ！ー！」

「わかった！ー！メアドと携番教えてくれ！ー！」

結局赤外線通信させられた。

「じゃあな」

「おう！ー！また後でな！ー！コウちゃん！ー！」

振り返ると、両手を大きく左右に振っている身長185センチの子供がいた。

そういえば、こんな風に遊ぶ約束をして「また後で」と手を振られたのは初めてだった。そう考えると、なんだか少し嬉しくなって光も小さく手を振り返っていた。

「電話するよ・・・南」

さて、それじゃあ林檎に説教されに行こうか。

上履きに履き替えた後、登校したことを報告するために職員室のドアを叩いた。

「肴山、只今到着いたしましたあ」

「今日は何だ？ケガしたオッサンでも見つけたか？」

「いえ、お姉さんです」

「美人にうつつを抜かしたる場合かお前はあ」

「じゃあ先生ならどうする？道で綺麗なお姉さんが助けを求めてきたら」

「ほっとくわけないだろう」

「だよねえ」

心から、こんな毎日が続いてほしいと思う。確かに本当の自分を理解してもらえないのは心苦しいものがある。だがそれ以上に、この平和な日常が幸せなのだ。学校にはみんながいる。林檎がいる。家に帰れば美月と渚が待っていてくれる。これ以上は足りない。十分だ。

だから、どうか……。

「肴山君！！聞いてるの！？」

「あ、聞いてます聞いてます。俺も好きで遅刻してるわけじゃないんですよ。明日はもっと早く走ってきます！！」

「そうしてください？まったくもう。どれだけ遅刻すれば気が済むのよ。日本史だけじゃないわ」

好きで遅刻なんかするわけないだろう。出来るならば朝のホームルームが始まる前の空き時間も楽しみたいのだ。

しかし毎朝、まるで誰かの陰謀かのように誰かしらに奇襲を受ける。今朝は特例だが、だいたいは全員を伸ばさなければ通してくれない。最高で合計三回来たしぶとい輩もいたりする。道を変えても何故か必ず一回は襲われてしまうので、どうしても遅刻してしまう。

明日からは一時間くらい早く出ようか。

11 困惑（前書き）

話が前後してしまってますみませんm（　　）m

早恵の「シヨタ」発言により、光は爆発寸前です。

・・・やめとけばよかった。

ひとしきり暴れ回ったところでダラリと肩を落とし、ゆっくりと「
ちらを向いた。

そしてゆらゆらと近づいてくる。

怖すぎる。逃げた方がいいのだろうか？

どうしようかと迷っているうちに、とうとう壁際まで追いつめられ
てしまった。

「ひ、光？せめてその目やめようか。なんか肉食獣に見えてきたよ
？ね、ねえ・・・」

聞こえていないのだろうか。

無言で両手を伸ばしてがっしりと捕獲されてしまった。

というかこれは・・・抱きつかれているのか？

そのまま力強く抱きしめ続け、4、5回深い息をした。

落ちとこうとしているのかもしれない。

・・・抱きつく必要があるのかはわからないが。

そしてゆっくりと離れていった。

「・・・ふう・・・悪いな。どおもあの手のヤツは苦手なんだ。な
んかイライラする」

「・・・渚さんに似てるから？」

「へ？」

「早恵って渚さんみたいなのところあるよね？人の心の中探るの上手いし」

「・・・そうか・・・渚・・・ああ、だからこんなにデジャヴを感じるわけだ」

「でも渚さんはもつと大人っていうか・・・計画性あるよね。早恵は探りを入れてるかんじ。で、しっかりと人の弱みは握ってしまう・・・」

「それはそれでタチわりいな」

そこで話は中断されてしまった。

何故なら光が暴れた時の轟音を聞いて教員たちが駆けつけたからだ。しっかりと不審者用の武器まで用意している。

見つかるといういろいと面倒なので倉庫の中に隠れることにした。

「爆弾かあ！？大砲かあ！？」

「何じゃこりゃ！！まるで象が暴れたみたいじゃないか！！」

「いや、象が暴れたところで地面はえぐれないでしょう」

様々な詮索をしているようだが、倉庫の方までは来そうにない。

「・・・なあ」

「何？」

光が扉の隙間から外を覗きながら目を細めている。
何かを見つけたのだろうか？

「あれ・・・俺がやったのか？」

「え？あれって？」

「あの折れた木と・・・地面」

「少なくとも来たときはもっとキレイだったね。・・・覚えてないの？」

「・・・嘘だろ？」

「私がやったって言うの？」

「んなわけあるか」

・・・もしかしてあの怪力は男性でも珍しいのだろうか。

「光は何か特別なトレーニングでもしてるの？」

「そんなことするくらいなら昼寝する」

「普通の男の人って木を拳一発で折ったり出来ないの？」

「・・・お前は俺達をなんだと思ってるんだ」

そうか。出来ないのか。

では何故光には出来たんだろう？

「特別な鍛え方をすると出来たりしない？」

「・・・板ならまだしも、桜の木を人の力で折るなんて人間じゃな

」

何故かそこで固まってしまった。

光は口を開けたまま、まばたきを繰り返している。

「光？」

「あああああ！！！！！？？？？」

びっくりした。

いきなり大きな声を出したと思つたら、「鏡！！林檎！！鏡！！」とパニック始めた。

当然そんな大声をあげると外にも聞こえるわけで、先生達がこちらに気づいてしまった。

「そこかあああ！！！」

そう言いながら一人が走ってくる。担任の秋本先生だった。

慌てて跳び箱の裏にある掃除道具入れのロッカーに2人で飛び込んだ。

音はたてないようにしたが、もしかしたら見つかってしまうかもしれない。

心臓がすごいスピードで鳴り始めた。

だが、すぐに林檎はもつと大変なことに気がついた。

狭いロッカーだ。もちろん人が隠れるためのモノではない。2人ならなおさらだ。

光に抱えられるように入ったので、顔を光の胸に押さえつけ、肩を抱かれる格好になっていた。

二の腕のあたりから抱きついていたさつきとは違う。もっと包まれるような感覚。

18センチの身長差がひしひしと伝わるその体勢は、光を別人のように感じさせた。

光は細身の女顔だが筋肉はしっかりとついているし、身長も平均的で声が高いわけでもない。

肌色は白い方。目鼻立ちはくっきりしていて、正直言って綺麗だ。でも女装が似合うかと言われるとそうでもない。

実は光は、林檎が思っているよりも“男の子”なのかもしれない。

入学当時はあんなに女の子のように可愛い子だと思っていたのに、その可愛さが作り物だと知ってしまったからかもしれないが、最近ではゴツゴツした手や広い肩幅の方に目がいくので可愛くは思えても女の子には見えなくなっている。

今林檎は、その“男の子”に抱かれているのだ。

肩を抱いていない方の手は林檎の頭に添えられている。足元にはバケツなどが置かれているのでさらに狭くなっていて、膝と膝とが密着していて暖かい。

とうとう林檎の心臓は早鐘のように鳴りだした。

「・・・林檎」

「ふえい!!!??」

「・・・何だよ“ふえい”って」

「な、何でもない」

驚きすぎてまた変な声が・・・。
だって、いきなり耳元で囁くから・・・。

「あいつら、行ったぞ」

「あ、うん」

「出るか」

「そうだねっ」

「・・・？大丈夫か？顔色が良くないような・・・」

そう言いながら林檎の頬に手をあてて近くで顔を覗き込んできた。
真っ黒な瞳の中に、テイワズのルーンが蒼く浮かんでいる。思わず
見とれてしまいそうな程に綺麗だ。

「大丈夫！！大丈夫だよ！！」

「でも・・・あ」

やっと光も状況が飲み込めたようだ。
今更ながら顔を赤らめている。

「あゝ・・・教室、戻ろうか？」

「え、あ、う、うん」

緊張して上手く呂律が回らない。
すると何を思ったのか、光がまた顔を近づけてきた。そしてフツと笑う。

「何？戻りたくないの？」

「え！？なんで？」

「だって、ほら」

光はそう言っつて自分の腰を指差した。
どうやらいつのまにか光のシャツを掴んでしまったようだ。
急いで手を離れたが、恥ずかしくてたまらない。
光は微笑みながら耳元で囁き始めた。

「林檎ちゃんはまだ、光と一緒にいたいのかな・・・？」

「~~~~~」

また“ドSモード”だ。
どうしよう。

「ほら、言っただらん？」

「……い……たかないです!!」

あたし、頑張った!!

急いで外に飛び出して教室まで走っていかうとしたが、ロッカーを出たところで捕まってしまった。

勢いよく壁に押しつけられて少し痛かったが、それよりも光の表情が怖かった。

怒っているようだ。口を開けたので怒鳴られると思い、目をつむった。しかし一向に怒号が聞こえてこない。恐る恐る目を開けると光が悲しそうに私を見つめている。

光はそのまま何も言わずに倉庫を出て行ってしまった。

「……ひ……かる……?」

……何だったの？

12 宣戦布告(前書き)

お久しぶりです(汗)

学校の行事があつてなかなか更新できませんでした。が、また感想などございましたら一言でも一言でもいただきたく。。。

(･･････)

12 宣戦布告

「林檎、遅いじゃあ。もう昼休みちよっとしかないよ?」

「ゴメンゴメン」

お弁当、間に合うかな?

「・・・光は?」

「あそこ」

早恵が指差した先には、机の上にあぐらをかいて弁当をかき込んでいる光がいた。

それをイスに座って眺めているのは新井慎二。光と同じくクラスのムードメーカーで、2人はよく一緒に行動している。

「お前お行儀悪いぞ?」

「んんむむ」

「うるさくないやい。かあちゃんから教わらなかったか?」ご飯はちやんと座って食べなさいって」

「ん ゴホゴホッ」

「ほらあ。行儀悪くするからあ」

「か、けえ　　ゴホッ、ねえ」

「関係あるもんね」

なんで会話が成立しているんだろう？

バイリンガル？

少し拗ねているようだ。

なんだかわからないが多分、何か気に障ることをしてしまったんだろう。

逃げたから？まだイジメ足りなかったと言うのだろうか。
光の性癖は特殊かもしれないが、それに巻き込まれているのは林檎の方なのだ。文句を言われてもしょうがない。

「うん。私、悪くない」

「なにがよ」

「あ、いや。何でもないよ」

「何でもなくはないと思うな」

「え？」

「だってあいつ、落ち込んでるように見えるよ？」

落ち込んでる？拗ねてるんじゃない？

「ジュース買いに行ったんじゃない？」

「……」

「ま、いいけど。そんなに気になるなら声でもかけてやれば？」

「気になんか……」

「してない？ウソ。ずっと見てた」

「う……はい、話してみます」

5限目。

開始一分で光は眠りについてしまった。先生が何度も起こそうとしていたがびくともしない。

いつもなら一応の反応はするのだが、本当に機嫌が悪いようだ。

早く何とかしないとまた暴れはじめるかも……。

“キーンコーンカーンコーン”

チャイムの音でも起きない。

いや、起きてはいるのかも。うつぶせになっていてわからないが、とりあえず声だけでもかけてみよう。

「光」

「・・・」

返事はしてくれないが、目線だけはよこしてくれた。

「あの、さっきは・・・気を悪くしたのならごめんなさい。でも・・・」

「・・・」

私はMじゃありません。

そう言おうとしたのだが、何やら光がもの言いたげに頭を少し上げて呟いた。

「ん・・・謝んなくていいよ。俺が勝手に盛り上がったただけだから」

「え？盛り上がったの？」

テンション下がってるようにしか見えなかったけどなあ。

ふてくされているわけではあるが、どうしてもよさげな口調である。

自分が動けばいいじゃないかとも思ったが、渋谷光の隣にしゃがみ込んで耳を傾ける。

「あのさ、今からキャラの修正ってきくと思っっ」

「・・・は・・・？キャラ？」

何の話をしてるの？

「・・・え？話を読めないんだけど・・・さっきの話はもういいの？」

「ん。いいの」

いいんだ・・・。

こちらが“DS”行動に妥協しまくって謝っているのに、全く気にしていないようだ。

・・・人騒がせな。

「俺が今おとなしめなキャラに方向転換したらおかしいか？」

「うん」

当たり前じゃないか。

中性的なやんちゃキャラとして定着しきっているのに、今更静かになつたりしたら保健室に連れて行かれるに決まっている。

「今じゃクラス1のキャピキャピボーイだからね」

「・・・そんなに目立ってるか？」

「当たり前じゃん。・・・ていうか自覚がなかったことに驚きだよ」

やっちゃった。みたいな顔をしてるけど、自分で考えてやってたんじゃなかったっけ？

「なんで？どうかしたの？」

「・・・意味もなく笑い続けることに限界を感じた」

なるほど。光らしいと言えばらしい答えだ。

そう口にした彼は、どこか遠い目をしていた。光なりの落ち込み方だろうか。

「・・・・・・・・ぶっ」

「あ？」

「ゴメンナサイ」

その時、背後から突然肩をたたかれた。光の肩にも同じく手が乗っていたので、別の、第三者がいるということだ。

その人物はサラサラのショートカットヘアで林檎よりも背の高い、気の強そうな目をした女子・・・早恵だった。

「ふうん？・・・で？どんなキャラにしたかったのかな？」

え・・・もしかしてずっと聞いてた？

光の方を見ると、血の気の引いた青白い顔で早恵を見上げていた。

「ああ。大丈夫。私口は堅い方だから」

「早恵・・・」

「なに。別にとって食いやしないさ」

そう言っつて早恵は、なんとも楽しそうに再び光の肩を叩いた。

周りの人達には聞こえていないようだ。

不幸中の幸いだろうか。バレたのが早恵でよかった。光には悪いが、彼女なら力になってくれるかもしれない。

光は相変わらず魂の抜けた様な顔をしている。彼にだけ聞こえるように、また耳元で囁いた。

「光。私、早恵には話してもいいと思うな」

「・・・やだ」

「え？」

「コイツだって、俺が毎日ケンカばかりしてたって聞いたら引くに決まってる。せつかく作った“肴山光”が台無しだろ？」

「でも、ホントの性格には気づいてるみたいだよ？」

「それとこれとは話が別だ。性格がバレてようが、過去がバレるとは限らない。黙ってりゃ平気さ」

ならみんなにもそうすればいいのに。

別に性格が原因でケンカをしていたわけじゃないし、自分から向かっていったんじゃないなら人を睨まないようにすれば良いだけの話なのだ。

「まっつん。放課後、五分ぐらい時間もらえるかな？」

「もちろん」

二人とも満面の笑みだ。“ドS”っぷりはどっちもどっちである。

12 宣戦布告（後書き）

不定期ではありますが、これからもよろしくお願いいたしますm
| |) m

テイワズ7 (前書き)

よく考えたら、光の学校用のキャラがあまり話に出せていないような気がします(つ、)

気をつけます

テイワズ7

俺は今、ガラにもなくブルーになっている。

『い……たくないです!!』

そりゃ、あの状態で「一緒にいたい」なんて言うヤツはそうそういない。よっぽどのマゾか、そういう関係なら話は別だが。それでもやっぱり、拒否されたという事実は俺の心に突き刺さる。

あ……れ？

そういえば俺達って、どういう関係？

クラスメイト。

隣の席。

家が近い。

……同じルーンのコンフォーマー。

俺の両目にあるテイワズ。林檎の右側の鎖骨にある灰色のテイワズ。それらは俺達が触れ合えば色を変え、俺のテイワズはブルーに。林檎のテイワズは少し薄目の水色になる。

実は光は、自分のルーンが蒼くなるのを見たことがない。林檎に触れている間しか見ることができないのだから、当然と言えば当然である。つい最近までは、自分が陸の人々（ランドピープル）なのか海の人々（シーピープル）なのかすら知らなかった。

美月が能力を使うとルーンも蒼く変わっていたので、光も使ってみ

ようとしたことがある。しかし、まだコンフォーマーにも出逢っていない自分が能力を使えるはずもなく、結局わからなかった。林檎に出逢わなければ、何もわからなかったのだ。

自分は今も、コンフォーマーからエネルギーをもらわなければ動かない体になってしまった。エネルギーが切れれば、眠った状態になるらしい。

林檎がいなければいけないのだ。彼女がいなければ。

・・・いや、違うな。

俺は林檎がコンフォーマーでなくても、一緒にいたいと思うだろう。

お前は俺の事、どう思ってたのかな？

コンフォーマーはルーン所持者にエネルギー補給をさせるだけ。ルーン所持者はコンフォーマー達がいなければ生活出来ないが、コンフォーマーはルーン所持者が近くにいなくても不便はない。

林檎にしてみれば、俺は迷惑なヤツなのかもしれない。

「俺・・・嫌われてんのかも」

授業中、誰にも聞こえないように呟いた。教師が何か言っているが、起きる気にはなれなかった。

一人で勝手にはしゃいでたのか？

迷惑だったのか？

・・・さて。これは少女マンガで言えば女の立ち位置だろう。

なにを卑屈になっている？俺はこんなに気弱な人間じゃない。やっ

かい事だっっていうも受け流していたじゃないか。

そうだ。受け流せ。

「光」

いつのまにか授業は終わっていたようだ。林檎が声をかけてきた。

「あの、さっきは・・・気を悪くしたのならごめんなさい。でも・・・」

なんだか謝られているな。

でも気にしない。何故なら“無駄な悩みは増やさない”が俺のモットーだから。

「ん・・・謝んなくていいよ。俺が勝手に盛り上がったただけだから」

「え？盛り上がったの？」

クラスの何人かが不思議そうにこちらを見ている。

気は進まないがキャラを崩すわけにはいかないので、どうにか笑顔をつくった。

「ちょっと耳かして」

「う、うん」

周りには聞こえないように、しゃがんだ林檎の耳に向かって問う。

「あ、さ、今からキャラの修正ってきくと思っっ？」

「……え？話が読めないんだけど……さっきの話はもういいの？」

「ん。いいの」

林檎は不服そうな表情だが、自分の中では一応解決しているのだ。いちいち傷を掘り起こす必要はない。

「俺が今おとなしめなキャラに方向転換したらおかしいか？」

「うん」

……即答か。

「今じゃクラス1のキャピキャピボーイだからね」

「・・・そんなに目立ってるか？」

「当たり前じゃん。・・・ていうか自覚がなかったことに驚きだよ」

マジか・・・。

完全にやりすぎたな。

「なんで？どうかしたの？」

「・・・意味もなく笑い続けることに限界を感じた」

「・・・ぷっ」

「あ？」

「ゴメンナサイ」

・・・あ、睨んじゃった。

昔から人を睨むとろくな事がない。とていうか睨まなくても元々そういう目つきなのだ。気をつけなくては。

なんとか表情を作ろうとしたその時、後ろから軽く肩をたたかれた。林檎ではない。その腕をたどっていくと、「まっつん」の顔があった。

デジャヴ。

確か前にもこんな表情を見た事がある。美月の留守中、誤って皿を割ってしまったときだ。皿を割ったのを渚に見られ、「黙っというやるから一週間パシリやれ」と言ったヤツの顔は、確かこんなだった。つまり、良いことが起こるはずがない。

「ふうん？・・・で？どんなキャラにしたかったのかな？」

・・・。

え？こういう場合はどうすればいいの？
てか今のつて聞かれてたパターン？
バレちゃったパターン？

「ああ。大丈夫。私口は堅い方だから」

そういう問題じゃない!!!

「早恵・・・」

「なに。別にとって食いやしないさ」

喰わせるか!!!

地獄耳だな。いや、最初から聞いていたのか？
どちらにせよ、このままではまずい。

どうする……？

混乱した頭で考えをめぐらせていると、林檎が耳打ちをしてきた。

「光。私、早恵には話してもいいと思うな」

話す？

それでコイツが誰かに話したりしたら、俺はまた不良グループの仲間入りだ。

結構めんどくさいんだからな？

特に呼び出しとか。何故わざわざこっちから出向いてやらなきゃならないんだ。他校のヤツは闇討ちとかするし。近所迷惑だったの。

「……やだ」

「え？」

「コイツだって、俺が毎日ケンカばかりしてたって聞いたら引くに決まってる。せつかく作った“肴山光”が台無しだろ？」

「でも、ホントの性格には気づいてるみたいだよ？」

「それとこれとは話が別だ。性格がバレてようが、過去がバレるとは限らない。黙ってりゃ平気さ」

そうだ。

実はこんな性格でした。とか、そんなことだけ言っておけばいい。そしてそれとなく口止めをしておこう。

「まっつん。放課後、五分ぐらい時間もらえるかな？」

「もちろん」

そう言ってヤツはニヤリと笑った。

もしかしたらこれをネタに脅してくる気かもしれない。

さすがの俺も女に手を挙げることはできないから、どうにか言葉で説得してみせる！！！！

「今何話してたんだ？」

二人が去った後、コソコソと近寄ってきた新井慎二は何かに怯えているように見えた。

「ん〜？ちよつとイタズラされちゃっただけだよ」

「松下に？」

「うん」

「なんかお前の笑顔怖かったぞ？怒ってたのか？」

いつも通り笑っているつもりだったのだが・・・気をつけなければ。改めて柔らかい笑顔を作ってみたが、今度はできているだろうか？

「ただのイタズラに怒ったりしないよお」

「う〜ん・・・だよなあ？・・・あ、そういえば！！お前、金曜までは水野とケンカしてたよな！？」

「え？・・・あ」

「でも今日は最初の頃みたいに戻ってた！！もしかして金曜の放課後なんかあったのか？」

「そ・・・れは・・・」

これはまずいぞ。

コイツにルーンの事は話せない。なんとかごまかさないと！！

「野暮なこと聞くなや慎ちゃん・・・俺だって男だぜ・・・？」

「昔前の愁いを帯びたクサイセリフみたいな感じで言ってみた。どつやら受けたようだ。」

「ヒュー。モテる男はツライねえ！！」

「・・・モテてたら何の苦労もなかっただろうね」

「ん？やっぱお前、水野か？」

「え？」

慎二は妙ににやついた顔でこちらを見ている。

「とぼけたって無駄だぞ。あいつ、好きなんだろ？」

そう耳打ちされた瞬間、体温が一気に上昇していくのがわかった。特に顔が。

その所為か、大笑いしてしまった。

「正直なヤツだなあ！！まあ可愛さでいったら納得だな。・・・で

もあいつ、どっちかって言ったら妹ツポイよな」

「あ……うん、そうかも。それがどうかしたの？」

「いや、お前と水野がくつついたらキャラ的な立場はどうなるのかと」

「キャラ的な立場って？」

「だから、光は弟キャラで水野も妹キャラだったらどっちが上になるのかな？つてこと」

そんなの気にすんなよ……。

というか実際、光はそんな人間ではないし、誰かの下につくなんてことは絶対にしないだろう。たとえ相手が渚であろうと、本気で従う気はさらさらない。

「……さあ？考えたこともないなあ」

「うん。考えてもわからん」

「ぷっ。なんだよそれえ」

なんだか2人とも可笑しくなって、声を上げて笑ってしまった。いつの間にか鳴っていたチャイムにも気づかず、教師に一括されるまで笑い転げていたのだった。

13 二人目の渚（前書き）

いや、松下早恵は別にサディストではないんですよ。……（ノ”

ただ他人の問題に茶々入るのが楽しいだけなんですよ。

つまり、現在光君。遊ばれてます

13 二人目の渚

放課後。

私達は屋上のだ真ん中に立っていた。……一人をのぞいて。光はフェンスの上に座っていて、態度はいつもの光に戻っていた。

「約束があるんだろ？早く話しなよ」

早恵はいつになく挑発的だ。そしていつになく楽しそう。そんな早恵に対し、光は満面の笑みを浮かべてこう言った。

「ダレのせいだろうねえ？」

……いつもより少し声が大きい。
怒ってるなあ。

「でもそうだねえ。早く終わらせたいもんねえ？じゃあ早速……」

そっぴいなながら光がフェンスから飛び降りる。そして早恵の目の前、あと50センチ程の距離まで歩いてきた。そのまま早恵を見下ろし、口を開く。

次の瞬間、まるで別人のように低い声が聞こえてきた。

「何のつもりだ」

うわぁ。

たった今何人が殺してきましたみたいな顔してる。

それでも早恵は動じない。

「すごいね。二重人格？」

「ちげえよ。人を病気みたいに言うな」

「わかってるよ。演技だろ？」

この間も二人は動かない。光は眉間にシワを寄せて早恵を上から睨みつけ、早恵は下から探るよつに覗き込む。

「・・・それで？」

「なこれ」

「とぼけんな。弱み握って脅してやろうとでも考えてんだろ？」

「...」

「違ってるのか」

「ちょっと違う」

「なんだよ」

光の眉間のシワが深くなってきた。どうやら早恵ののんびりした喋り方が気に入らないようだ。

「別に金出せとかは言わないよ」

「……？」

「あなたの芝居も黙っといてやる。それどころか、協力しようとしてるんだよ？私」

「は？」

一瞬だけ光の眉間からシワがなくなったが、またすぐに深く刻み込まれた。

「もちろん条件はある」

「……だろうな」

「あなたがみんなに隠してることを、私に全部言いな」

早恵は自信満々に光の胸を人差し指で突いた。
まさか早恵・・・何か感じている？

「・・・何を話せてんだよ？特に隠してる事なんて

「無かったら演技なんてしないと思うけど？」

「・・・」

「あれ？言えないの？まあ無理には言わないけどね。じゃ、私は
本屋に行く予定があるから」

そう言うとクルリと向きを変え、階段の方へ足を踏み出した。

「待て！！」

「・・・言う気になった？」

「・・・ああ」

返事を聞いた早恵は再びこちらに近寄ってきてその場に座り込んだ。

「契約成立」

「・・・はああ」

「早恵、やっぱりすごいね。光のこんな悔しそうな顔見たことないかも」

「ありがと。さあ、座って座って」

なんだか渚さんよりも強引なやり方だが、これでよかったと思う。協力してくれるらしいし。

座ろうとしたとき、耳元で小さな声があった。

「ルーンのことと言っな」

光だ。

さすがに林檎もそのぐらいのことは承知している。

「・・・えつと。中学の時になるが・・・俺は少々目つきが悪くて、不良どもに絡まれることがしばしばあった」

「少々？」

「・・・なにか？」

「いえ、続けて下さい」

「・・・そのせいでよくケンカをしてて・・・別に自分から進んで向かってたわけじゃないし、相手に怪我負わせることだってほとんどなかった。それでも、学校ではいつも問題児扱い。俺が怪我して登校したらすぐに呼び出しだ。・・・それも数ヶ月したら無くなっただけだ」

「なんで？」

「怖いからさ。俺がそういう奴らと関わりがあることが。そのうち殺られるとも思ったんじゃないの？・・・仲の良いヤツがいなかったわけじゃない。俺みたいなのヤツが他にも数人いたからな。でもこのままじゃ家の奴らに迷惑がかかる。実際学校に呼ばれたこともあったし」

「で、家族のためにイイ子ちゃんになっただけだ？」

「・・・イイ子になったつもりはねえよ。ただケンカをやめるために絡まれないような人間になろうとしてんの」

「ふうん？・・・ケンカは無くなった？」

そう早恵に問われると、首を小さく横に振って答えた。

「やっぱり、俺を良く思わない奴らはたくさんいて・・・よく登下校中に待ち伏せされる」

「え？そうなの？じゃあ光が毎日遅刻してくるのは・・・」

「・・・そりゃ遅れるわけだ」

「・・・」

光の目がまた遠くを見つめ始めた。

そんな事があつたとは・・・だから遅刻の理由をはつきり言えなかつたのか。

でも「UFOにさらわれかけた」というのは正直言つてやりすぎだ。

「うーん。それは悩みモノだね。でも怪我して学校来たことはないような気がするんだけど？」

「ん？ああ。ここ一年半ぐらい強いヤツに襲われることがなくなつてな。大抵はどうにかなる」

それは場慣れというやつ所の為では・・・？

「ふうん、そつか。・・・さすがに待ち伏せを無くすことは出来ないけど、学校のみんなに気づかれない為の協力ならできそうだね」

「・・・松下」

名字で呼ばれたことがないからか少し驚いたようだが、すぐに元の

調子に戻って応えた。

「何？」

「なんで協力しようと思うんだ？何かお前にメリットでも？」

確かに。

本気で対策を考えてくれている様子だが、早恵にとっては他人事ではないはずだ。

すると、早恵はまた挑発的な笑みを浮かべてこう言った。

「そんなの、面白いからに決まってるじゃん」

そういえば、前に趣味を聞いた時「人間観察」と言っていたような気がする。

彼女にはその人の言動から性格や考えを読みとる能力があるようで、よくクラスメイトをプロファイリングしている。

あ、だから光が演技をしていると気づいたのかも。

「……やっぱり、渚2号だ」

「……うん」

「?????」
「あ」

早恵が思い出したように光に目を向けた。

「約束は？」

「・・・あ!!！」

光が勢いよく立ち上がり、携帯電話を取り出した。そして後ろを向いて誰かに電話をし始めた。

「あ!!!南!？」

『 『

「ああ。悪い!!!待たせちゃって」

『 『

「そうか。今家か？」

相手の言葉が聞き取れない。

林檎と早恵は互いに目配せをすると、光に気づかれないように近づいて耳を傾けた。

『今　　を歩いて　　』

「ああ。じゃあ今から行くから」

『　　そつちに　　か？』

「ダメ。くんな」

『なんで！！！　　ちゃん、ひど　　』

「うっさい。それと・・・何やってんの？」

あ、バレた。

「気にしないで。続けて下さい」

「アホ。盗み聞きしてんなよ」

「別にいいじゃないか。減るもんじゃなしに」

『　　ちゃん。誰　　のか？』

相手の人が2人の存在に気づいたようだ。
光はめんどくさそうにこちらをチラリと見た後、階段に向かって歩き始めた。

「気にすんな。とりあえずそっち行くから待ってる」

『じゃ オレもそっち』

「だからくんたつたろ？メンドいから」

『わかった！！！ツンデレだ！！！』

「耳元でふざけたこと叫ぶな！！切るぞ！！！！」

『わっ！！ちよっ』

ツ ツ ツ 。

「……………ツンデレかぁ」

「人の顔見て眩くな」

「林檎、ツンデレはデレて初めて成立するものなんだよ」

「あ、そっか！！まだツンだ！！」

「へんなこと吹き込むな。そしてツンデレはやめろ」

「そっだよな、まだツンだもんね！！」

「…………林檎、ちよっと黙ろつか？」

電話の相手はたぶん、今朝校門のところに行った長身君だろう。
もしかしたら彼は、自分よりも光のことを知っているかもしれない。
なんだか少し気になってきた。

テイワズ8 (前書き)

嵐が来ます (笑)

テイワズ 8

光はツンデレコールから逃げるように教室に戻り、荷物を持って下駄箱に向かった。

他の学年と帰りが重なったようで大いぶ混雑しているようだ。

この時間はいつもこうだが、今日は少しもどかしい。

「あれ・・・？」

なんだかふらついてきた。そんなに走った覚えはないのだが・・・。なんとか靴を履き替えて傘立てに手をつけてしゃがみ込んだ。

「やっぱり、昼休みのアレは・・・」

昼休み、教師達を騒がせた体育館裏事件。ホームルームでは「不審者が入った可能性がある」として、今日の部活動は日が落ちる前に終了させると言っていた。

もちろん、不審者など入ってはいない。

体育館裏の桜の樹を真っ二つに折ったのは、誰あろう光自身なのだ。

人間の力で出来るものではない。あらゆる可能性を考えたが、一つしか浮かばなかった。

「テイワズ・・・戦いのルーン」

光の持つテイワズは、戦いを意味するルーンだ。もしテイワズの力を使えるようになったのだとしたら、怒りにまかせて暴れたあの時、知らないうちに使ってしまった可能性が高い。まだどんな能力があるのかすら知らないのだ。気をつけなければ、周りの人間に知られてしまうかもしれない。

「やば・・・エネルギーが・・・」

とりあえずここを動かなければ、先程からこちらを見ている2年の女子達に保健室に連れて行かれそうだ。

「光！？どうしたの!?!」

「林檎・・・」

ナイスタイミング!!

「ちょっとこっちこい!!」

「え!?何!?!」

少し強引だが、背に腹は代えられない。
腕を引いて校庭から死角になる木の影に走った。

「はあ、はあ・・・林檎、エネルギー切れだ・・・くれ」

「え？もう？」

「使っちゃまったみたいなんだよ」

「そ、そっか。いいよ」

その言葉を聞いて既に頭の回らなくなっていた光は、林檎の首筋に喰らいついた。

「ん！！！！ひ、光・・・あああ」

「ん・・・」

まるで腹が満たされるように、体中にエネルギーが満ちていく。
やっと脳が正常に戻った光は、林檎の体から段々と力が抜けていくのがわかった。一旦口を離し林檎が倒れないように抱き留めたが、すぐに自力で立てるようになったようだ。

「悪い！！！！一気に吸いすぎたな」

「大丈夫大丈夫・・・続けていいよ」

林檎の顔は真っ赤になっていた。だが、やはりまだ充分には吸えていない。

「いいのか？」

「うん」

「・・・もっとうぞ」

今度はゆっくりと吸っていく。

「うう・・・」

おとなしく動かないように耐えている様はとても健気だ。どうしてもこういう姿を見ているとうずうずしてくる。

光は我慢できずに、林檎の腰に腕を回そうとした。

・・・が。

突然誰かが雄叫びをあげて突進してきた。

「てめえかああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

「!?!」

「きゃ!?!」

しかし、奇襲など何度も経験している光は林檎共々あっさりとかわしてしまい、当の本人はそのまま真っ直ぐに転がっていった。しばらく頭を抱えてウンウン唸っていたが、二人が自分を見ていることに気がついてパツと立ち上がった。

上級生だろうか。細身の派手な服装をした男子生徒だ。鼻を鳴らしてこちらを睨んでいるが、いまいち迫力に欠ける奴だ。男子生徒は腕を組むと、ポーズを決めてこう言った。

「フツ。少しはできるようだな」

・・・・・・・・・・・・・・・・は？

「ちよつと柚樹!?!」

男子生徒の正体を確認して林檎が叫んだ。

柚樹・・・・・・・・?知り合いか?

「林檎!?!コイツだな?お前をたぶらかしている小童は!?!」

たぶらかす？

何のことだ???

てか小童って・・・俺か？

「だから！！違っつて言ってるでしょ！！光はクラスメイトの男の子で、席が隣だから仲良くなったの！！なんか文句ある？」

「ある！！見てたんだからな！！林檎が襲われてるところを！！現行犯だ！！！」

襲ってないし。

いや、手を出しかけたのは認めるが。
というか誰なんだアンタ。

「名を名乗れい！！ここでたたっ切ってやる！！！！！」

「・・・肴山・・・光」

「・・・意外と素直なんだな」

「はぁ・・・どうも」

「だがしかあし！！そんなことで認める程甘くはないぞ小童あ！！！」

「柚樹、うるさいってば・・・ていうか、どうしてまだ帰ってなか

ったの？」

林檎がため息と共にあきれ声を吐き出すと、ショックを隠しきれないと言わんばかりの表情を浮かべた。

「朝学校に着いてから言ったじゃん！！放課後は迎えに行くから教室にいてって。なのに林檎いないから探し回ってたらこの人に引張られて走ってるのが窓から見えたの！！」

「そんなこと言ってたっけ？」

「言ったもん！！全く覚えてなかったんだね！！」

マズい。このままでは南を待たせてしまう。
どうにかして話を切り上げなければ。

「あ……林檎」

「僕の林檎を呼び捨てにするとは！！なんて図々しいヤツなんだ！！」

「柚樹のモノになった覚えはないんだけど？」

「僕の」だって???????

イイ度胸じゃねえか。

「ええい！！正々堂々と勝負だ小童！！」

「お兄ちゃん！！！！！！！！！！」

二度目の突進をしようと身構えた柚樹を見て、とうとう林檎のナニかがキレた。

相当頭に血がのぼっているのか、柚樹の耳元で林檎が叫んだ。

しかし光はそのことよりも、口にした言葉の方が気がなった。

今「お兄ちゃん」って言った？

「は、はい・・・？」

「失礼にも程があるでしょうが！！！！そんなに歳も変わらないくせに小童呼ばわりして！！！！なんにも悪いことしてないのにいきなり暴力振るうなんて！！！！謝りなさい！！！！！！！！！！」

「じ、めん・・・なさい」

いや、むしろ怪我をしたのはその人なただけ。

林檎に一喝されて一瞬で小さくなってしまったその人は、涙目になつて震えている。

「ふう……ゴメンね、うるさくしちゃって」

「あ、いや……えっと……お兄さん？」

「君にお兄さんと呼ばれる筋合いはない……！」

「……」

「ごめんね……！黙ってるから……！そんな目で見ないで……！」

「……そう。水野柚樹、私の兄です。ちょっとシスコンの傾向があつて、面倒な人だけどよろしく」

見たまんまだ。

柚樹はまだ反論し足りないようだが、また怒られるのが怖いのか動けずにいるようだ。

なんだか可哀想になつてきた。

「い、妹思いのお兄さんなんだな」

いたたまれなくなつてそう言つと、柚樹が予想外な反応をした。

瞳を涙できらめかせてこちらを見てきたのだ。しかしそれでも声だけは出したくないらしく、激しく首を上下に振り出した。

だが林檎は意図して放置した。

「ほら光。人待たせてるんでしょ？」

「あ、うん。・・・じゃあ、またな・・・。お兄さん、ちゃんとして挨拶出来なくてすみません。失礼します・・・。」

「あ。いえ、こちらこそ」

こちらが礼をしたのを見て丁寧に戻してくれたのだが、柚樹は元々正座をしていたので土下座の様になってしまった。何故だろう。この人といると自分が悪いような気がしてくる。

光が立ち去る間にも、林檎が説教を始めていた。なるべく早く歩いてその場を離れたが、柚樹を助けるべきだったのかも知れない。何を隠そう、林檎の兄なのだ。仲良がいいにこしたことはない。しかし今回はかりは仕方がない。今柚樹をかばっても林檎に疎まれるだけだ。本末転倒ってやつだな。

校庭にはまだたくさんの生徒が歩いていた。

大声で騒ぎながら集団で帰る生徒や、本を片手にゆっくりと歩く生徒。おしゃべりに夢中になっている女子。

その中で、なぜかカバンを2つ持っている女生徒がいた。女生徒はこちらに気がつくとスタスタと近づいてくる。

「松下？」

「話は終わった？」

「え？話・・・？」

まさか、また最初から見られていたのだろうか。だとしたらまずいはたから見れば隠れて変なことをしているようにしか見えなかっただろう。

「さつき金メツシユ入れた常人らしからぬ人がそつちに飛び込んでいったら？」

「……」

「あんたがあの人と対面して何も起こらないはずがないからね。少しくらいは話したんだろ」

「……転がってきて凄んで怒られた」

「????」

この説明でわかるはずもないが、詳しく言う気にもなれなかった。どうせ林檎から愚痴という形で聞くだろうから言う必要もなさそうだが。

話を変えるために先程から気になっていたカバンに目を向けた。すると視線に気がついたようで、こうなった経緯を話し始めた。

「急がなきゃ光行っちゃうよ!!見失っちゃう!!」

「私まだ荷物まとめてないから先行つて。電話するから」

「うん・・・わかった。すぐ来てよ!!」

そう言つて林檎が教室を出て行つてから5分後。

靴を履き替えて校舎から出ると、どこからか自分を呼ぶ声がする。

「さあ~~~~~え~~~~~ちゃあ~~~~~ん!!!!!!ぱ~~~~~
~~~~~ス!!!!!!」

ようやく声の主を認識した瞬間、目の前にはシヨルダーバッグが迫つていた。

なんとかそれを掴むと、走り去る金メツシュが視界に入る。

「 柚樹先輩・・・!?!? 」

「 ゴメンね!!戦いに行かなきゃならないから預かつて!!!! 」

「 え!?!?ちよっ 」

呼び止める隙さえ与えず、彼は校庭から校舎裏へとつながる道にある木の一つに向かって飛び込んでいった。そのとたん、小さな悲鳴と「何か」が地面を転がる音がした。

どうやら誰かいるようだ。

目を凝らして見てみると、2人の男女が立っているように見える。

後ろ姿ではあるが、確かに林檎と肴山だ。

まだ学校にいたとは・・・とりあえず電話をする必要はなくなった。

「戦い・・・ねえ？」

何をしに行ったのかは明白だ。愛しの妹が見知らぬ男と二人きりなのだから。たとえ肴山が何もしていなくとも、彼にとっては一緒にいるだけで罪なのだ。

見たところ乱闘になっているわけではなさそうなので、終わるまで待つことにした。

「……………」

「・・・そうか。じゃあ今度は何故俺を見失ってはいけなかったのかを教えてもらおうか」

「ええ〜。林檎に聞けよお〜」

「いやそんな顔しても無駄だぞ」

どうやら中学生時代の友達だという電話の主に興味が湧き、後をつけようとしていたらしい。確かに初めて会ったのは中学の時だが、実際に知り合ったのは今朝である。

「何？暇なの？」

「本屋に行くのを諦めただけさ」

「・・・そう」

要するに暇なんじゃないか。

「はあ・・・。じゃあ林檎が戻ってくる前に行かなきゃな」

「なんで？会わせたくないの？」

「とっつっても面倒くさいヤツだから。林檎に会わせるくらいな

ら全力で逃げる。というわけで俺は行く」

「じゃあ私は林檎と一緒に後から行くよ」

「俺の話し聞いてた？」

「行かないなんて言ってないだろう？」

そう言ってヤツはニタリと笑う。

というか、尾行宣言なんてしてもいいのだろうか？

テイワズ8 (後書き)

I love 妹。

そんな柚樹さんが恋人とうまくいく秘訣ってなんなんでしょうね)

- - ;)

きっと彼には女顔の敵兵にお姫様がさらわれていくような心境だったことでしょう。

14 追跡の末に（前書き）

次話投稿遅れまして申し訳ございませんm（　　）m

言い訳をさせていただきますと・・・まあ一言で言えば修正です。

今まで投稿したお話を少し手直ししていました。

物語の進行にはあまり変わりないようにしたつもりですが、なにぶん初心者なもので、書き始めた頃の文章にまとまりがなかったのに最近気づきました（^^;）　少し直すつもりが、登場人物の口調などを結構直したり・・・;

読み直していただくほどではございませんが、今後のお話をスムーズに読み進んでいただくためには一度読み返す事をお勧めします。

14 追跡の末に

嫌がる兄を帰宅させ、自分も下校しようと思恵に電話をかけた。しかし彼女もまだ校内にいるというではないか。

訳を聞くと、今まで足止めをしていたので、光もたつた今門をくぐったところなのだという。もう遅いだろうと諦めていたが、大丈夫そうだ。

早恵のおかげですぐに追いつくことができた。光は少し早足になっていたが、ついていけないほどではない。

そこからは忍者になった気分を追跡していった。

しばらく後ろから見ていると、新しそうなスニーカーが砂だらけになっていてことに気がついた。制服は綺麗なのに、足元は走り回った後のようだ。

光はいつも斜め掛けのリュックで登校している。かろうじて教科書が入る大きさだ。お弁当は二段の長細いものを使っているので一応入りはするのだが、大抵は中身がぐちゃぐちゃになってしまう。

本当に毎朝ケンカをしているのだろうか？

確かに暴れ回った形跡はたくさんあるのだが、怪我一つせずに登校するなんて可能なんだろうか。

そんなに強くなってしまつまでに日常的な事だったんだろうか。睨まれたと勘違いされたことが発端でも、そういう世界に迷い込んでしまうものなんだろうか。

抜け出せなくなつてしまつものなんだろうか。

数分後。

500メートル程進み、コンビニの前で信号待ちをしていた。

落ち着かないのか足首を回したり肩を伸ばしたりしていたが、信号の色が変わりそうになるとしゃがみ込んでしまった。不審に思いコンビニの角から身を乗り出すと、片膝をつき、前傾姿勢になっているように見える。

「あ、ヤバいかも」

早恵が一言呟くと同時に信号がGOサインを出し、光がものすごいスピードで走り始めた。

「あ!!!!!!!!!!」

すぐに追いかけてよとしたのが、運動というものをまともにしたことのない2人には到底無理な話である。ものの数秒で撒かれてしまった。

「どおしてバレたのかなあ???」

「・・・」

野生の勘だろうか？なんて便利なんだ。

せっかく早恵に足止めしてもらったのに失敗してしまうとは・・・。

「ゴメンね、早恵。次までに脚力鍛えとくから」

「次があるんだね」

さて、これからどうしよう。

思いのほか早く用事が終わってしまったので唐揚げでも食べに行こうか。確か近くに商店街があったはずだ。最近はなかなか行く機会がなかったので久々に行ってみよう。

早恵も小腹がすいたらしく、二人で向かうことにした。

「中学校は商店街と反対側にあつたからしばらく遊びに行つてなかつたんだ。でも下町つてかんで、いいところだよ」

「へえ。いいねえ、そういうの。こっちはビルばかりだよ」

「隣町のマンション街だもんね」

早恵は電車で隣町から登校している。親元を離れて一人暮らしなんだそうだ。

「スーパーはすぐ近くにあるけど、買い物しに行くだけさ。おもしろい事なんて起こりそうにないな」

「そっかぁ・・・じゃあきつと気に入るよ!!! いろんな人がいるから!!!」

早く早恵にも見せてあげたくてウキウキしながら、いつもより速めに歩いていった。

子供のイタズラだろうか。途中、コンクリートに石で大きく書かれた「光」の文字を見つけたが立ち止まったのは数秒で、笑い合うのも歩きながらだった。

「ほう。確かに賑やかなところだね。顔見知りとかいたりするの？」

「生まれる前から来てたからね。お母さんのお腹の中にいた頃からだからほとんどの人は私の事知ってるよ。でも最後に来たのが中学2年生の時だからなあ・・・みんな覚えてないかも」

「じゃあ唐揚げ買いに行ってみよう。その人も知り合いなんだろう？」

「惣菜屋さんには何かとお世話になってたからね」

というわけで、まずは惣菜屋まで行ってみることにした。

商店街は最後に見た時と何も変わっていない。多少新しい店員が増えているところもあるのだが、それでも独特の暖かい空気は懐かしいばかりだ。

「すみませ〜ん、唐揚げ2つください」

「あいよ。ちょっと待ってねえ」

店の奥から聞こえる高い声。姿は見えなくても人物を特定するのはたやすかった。

「はい、唐揚げ2つ

」

「山根のおばちゃん!!」

突然林檎が叫んだことに驚いたのか、揚げたての唐揚げが入った包みを持って立ち止まってしまった。しばらく口を開けてこちらを見つめていたが、段々とこちらに近づいてきてつぶやく。

「・・・林檎ちゃんかい？」

やった!!

覚えててくれたんだ!!

「うん!!林檎だよ!!」

「まあ!!まあまあまあ!!久しぶりじゃないかい!!もう来てくれないんじゃないかと思ってたよ!!まあああ!!べっぴんさんになってえ!!そっちはお友達かい？」

「早恵っていうの。高校で一番仲良しなんだよ!!」

「こんにちは」

「あらこんにちは！！しっかりした子だねえ。この子たまに素直すぎるところがあるから気をつけてやってね？」

「あ、それは大丈夫です。既に何回かやらかしてるんで注意してますから」

「あははは！！そうかいそうかい！！」

「え？私なんかした？」

「コンビニで1000円ぼったくられそうになったりね」

以前と変わらずに接してくれる安心感。
やっぱり私は、この町が大好きだ。

そのまま立ち話をしながら惣菜屋の軒先で唐揚げをほっばっている
と、向かいの氷屋に人だかりが出来始めた。
見たところ輪の中心で何か勝負をしているようで、皆口々に「いいぞ」だの「負けるな」だのと叫んでいた。

「またやってるのかい？こりないねえあの子も」

「あの子？」

「最近毎日のように力試しに来る男の子がいるのさ。氷屋の竹蔵に

勝てる訳ないつてのにねえ」

「あの竹蔵さんに力で勝とうなんて無茶な人もいるんだね」

そんなことできるわけがないと笑っていると、静かに人だかりを眺めていた早恵が突然目を丸くした。

「あ……れ？」

「どうしたの？」

「山根さん。その男の子つてもしかして……金髪の長身だったりする？」

「そうね、竹蔵よりやだいが高いよ。つんつん頭の金髪だったし。見た目はだらしないけど優しくていい子みたいだねえ」

「……」

今度は真顔で最後の唐揚げを口に詰め込んだ。

「早恵？」

「……林檎。たぶんあの中にいると思うよ」

「何が？」

「肴山」

「!？」

まさか。

そんな偶然があるとは思えない。

それでも、視線は人の群の中へと移動してしまふ。

そして見つけた。群の中心で竹蔵と腕相撲をしている金髪頭を。それを見つめる一人の少年を。

15 すれ違いの憤怒（前書き）

お久しぶりです（^ - ^）；

テイワズを書くのはやっぱり大変ですね。

到底オナナのことは言えない私でも、男の子の心情は謎だらけなので（*´、*´）

女子たちが体重を気にする中、実はそんな所はあまり問題視していない男子が多いらしいですし。よくわかりませんが……。

でも確かに、友達と「理想の彼」について話しているときにはそんな奴いねえだろって感じの人物像が次々と浮かんでくる反面、実際につきあっている人はあまり引き締まっていなかったりしますよね（. . .）
まあ見た目が良ければいいわけじゃないってことです。

男性陣はどうなんですかね（. . .）（. . .）

とか言ってるクセに今回はテイワズ編じゃなかったりします（汗）

長々とすみません；

でわでわ

15 すれ違いの憤怒

「・・・いた」

「だろ？」

人が多すぎてよく見えないが、あのしかめっ面は十中八九、否、間違はなく光だ。どうやら連れれの行動にあきれているようで、また眉間にシワが集まり始めている。

それを知ってか知らずか、金髪の細マッチョは竹蔵との腕相撲に集中してしまっていた。

「行ってみる？」

「見つからないように近づこう。せつかく光のお友達に会えたんだから」

早速山根のおばちゃんに挨拶をして自分たちも群に加わった。

人をかき分けてようやく光の表情が確認出来る距離まで近づいた時、丁度決着がついた。

バンッ

「あああああ・・・」

「へっ！！！おとといきやがれた坊主！！」

どうやら予想通り竹蔵が勝利を収めたようだ。

金髪君は相当シヨックを受けたようで、腕相撲ステージとなっていた丸椅子にうなだれた。

「なんだよお。今日こそはと思つてたのに！！」

「悔しかったら特訓でもしてくるんだな！！」

「そうなんだよな・・・だから今朝ちよつとした特訓をと思つてある人に喧嘩売つたら吹っ飛ばされちゃうし・・・」

「・・・は？」

先程まで他人のフリをしていた光が不快そうに金髪君を睨みつけた。

「ちよつとまで。お前今特訓つて言つたか？」

「へ？あ、いやぁ・・・あははは」

「そのちよつとした特訓とやらのために俺は遅刻させられたのか？」

「いや！！そんなまさか！！だから、その・・・ねえ？」

「……」

光は他人に自分のリズムを崩される事を極端に嫌う。林檎にオモチャにされた(?)時も、一瞬頭のネジが飛んでしまったくらいだ。渚が相手の場合はなんだかんだで勝ち目が無いのですぐにおさまるのだが。

しかしこの場合はどうなるのだろうか？

明らかに光の方が優位に立っているが、男相手にスっ気を出したところで引かれるだけな気がする。

「違うんだよ!!まさかコウちゃんがこんなにいい子だとは思ってもしなかつて!!」

「……へえ」

必死で取り繕おうとする金髪君だが、光の対応は至極冷たいものだった。

ゆっくりと右手を腰に当てて首をかしげ、目尻を下げた。微笑んでいるようにも見えるが、どう考えても穏やかではない。

「じゃあ、俺がいい子に育ってよかったなあ?もし悪い子に育ってたら……いやあ、アブナイアブナイ」

おそらく金髪君の脳内は恐怖でいっぱいになっているに違いない。

少し日に焼けた健康的な肌は青く変色し、目にはあふれんばかりの涙がうかがえる。

「じ、ごめ……なさ……」

「ん？どうして謝るの、南君？」

これは止めた方がいいのだろうか？

集まっていた人達も金髪君に同情し始めている。

「肴山つて……見かけによらずダークだね」

「ま、まあね……」

「コレって止めなかったらどうなるの？」

「あの人の精神が破壊されるんじゃない……」

彼のトラウマを作ってしまう前にやめさせなければ。早恵も思っていると同じらしく、林檎の目を見て頷いた。

「ひ……光……！」

何も考えずに飛び出してしまった。

しかしこれで光の気を散らすことはできるはずだ。現に光の注意は金髪君から林檎に移っている。

「……林檎……？なんでここに……」

「あ、あれで撒けるとでも思った？ずうっとつけてたんだから!!」

なんとかひねり出した言葉がこんなハツタリとは……。早恵の顔色をうかがうと、想定外だったのか、目を大きく開けてこちらを見ていた。

「……何？そんな暇なの？君たち」

驚いて取り乱すだろうと思っていたが、いたって冷静に呆れているようだった。

「ひ、光がお友達いじめてるから止めに来たんだよ!!」

「……いじめてねえよ」

「ハタから見りゃいじめてるように見えるのさ」

「今の聞いてた？今日遅刻したのこいつのせいなんだぞ？」

「だからゴメンってば!!」

一瞬金髪君を睨みつけた後、商店街の人達に見られるのがいやなのか彼を引きずって歩き始めた。金髪君は泣きそうな顔で渋々連れられていく。

林檎はまだ怒り足りないのかと不安になり、早恵と共に歩いて行くことにした。

「ねえ光、かわいそうだよ。制服も伸びちゃうし・・・」

「知ってる」

知ってるって・・・。

いや、たぶん光は気づいてはいないだろう。

小さい人に胸倉を掴まれながら歩く大きい人。これはなかなかの恥ずかしさだ。

「コウちゃん・・・どこまで行くんだよ・・・なんかいやなってきた・・・女2人に見られてるよ、恥ずかしいよ!？」

「わあかったつての!!デカいのが両手で顔隠してる方が恥ずかしいんだよ!!普通に歩けバカ!!」

「今バカって言った!?!引きずられてちゃんと歩けるわけないだろ!?!コウちゃんのがバカ」

金髪君が最後まで言い終わる前に立ち止まってしまったのは、目の前に般若のごとく顔を凄ませた光がいたからだだった。

「待つて！！ストップ！！タンマ！！」

このままでは光がまた爆発してしまうかもしれない。その前になんとか静めないと、お肉屋さんの目の前にクレーターが出来てしまう。意を決して光のあいている方の腕に飛びついた。しかし何の考えがあるわけでもなく、林檎は困惑したまま光の顔を見上げる事しかできなかつた。

するとどうしたことが。

顔が赤い事に変わりはないが、怒りの表情はどこかに消えているではないか。

よくわからないがチャンスだ。

「ちゃんとお話、しよ？ね？」

光はごり押しで放った林檎の言葉を聞いたとたん、金髪君から手を離し、林檎と反対方向に顔を逸らして手で顔面を覆った。

「え？コウちゃん？」

「光？」

返事がない。

それに、心なしか息づかいも荒いようだ。

もしかして発作か何かだろうか？

だとしたら大変だ！！

心配になった林檎は急いで光の正面に周り、安否確認を行った。

「ひ、光！？どうしたの？苦しいの?????」

「わっ！！バカ、くんな！！」

「!?!?!」

どうやら非常事態ではなさそうだ。

では何故自分は「バカ」呼ばわりされたのだろうか？

バカって……心配してるのに……バカ？

「……そう。わかった。そんなに嫌なら寄らないよ。ごめんなさい？気がつかなくて」

「え？り、林檎？」

「じゃあまた明日。さようなら」

「え、ちよつ、違う!!林檎!!待つて!!!!!!」

そんなに必死で呼び止められても立ち止まるつもりはなかった。

「さ・よ・う・な・ら!!!!」

「おい、待つて!!!!なあ林檎!!!!」

「~~~~~しつこい!!!!」

あまりのしつこさについ叫んでしまった。

振り返った光の顔は蒼白で、動揺しまくっているようだ。

それでも今の林檎の怒りはおさまらず、光の目を見てはつきりと言った。

「ついてこないで」

テイワズ 9 (前書き)

いやあ、怒らせちゃいましたね(笑)

真顔で「ついてこないで」って言われちゃったら・・・きつついなあ(。。(

そもそも光君はなぜあの場にいたのでしょうか。
それが知りたい方はお次へ+++

(。。(つ

テイワズ 9

なんだろう。

ものすごく気分が悪い。精神的に。

今光の目の前では即席の腕相撲大会が行われている。

参加者はたった二人。坂下南と氷屋のオヤジ（というほどの歳ではないが）である。

それでも見物客を盛り上げるには事足りたようで、二人が丸椅子の上に腕を乗せただけで光は耳をふさぎたくなるほどだった。

しかし光の不機嫌の原因はそこではない。

俺は南の家に行くはずだった。そのために必死で走る林檎を泣く泣く置いてきたのだ。

なのに南は満足げな顔で氷屋と腕相撲をしている。

この俺を無視して。

何故こうなったんだっけ？

・・・ああ、そうだ。

バカがバカな事を言い出したからだ。

「ふう……………」

これだけ走ればついては来れないだろう。

しかしテイワズの力なのだろうか、明らかに足の速さが増している。しかもほとんど息が上がらないとは……。
きっと今朝の怪力もテイワズのせいだろう。でなければ自分より大きな南を殴り飛ばすことなど出来はしない。

さて、南は商店街にしていると電話で言っていたが、商店街のどこにいるとは言わなかった。早く探さなければ。

「コオオオ……………ちやああ……………ん!!!!!!」

「……………」

この声は……………。

「南、ウルサイ。恥ずかしいから手を振るな」

「いやあ、遅いから心配したぞ?」

「それは……悪かった」

「ま、何はともあれ、無事合流出来たんだ!!早速家に……と言

いたいところなんだがコウちゃん」

「・・・なんだよ？」

突如顔を近づけて真剣な眼差しを向ける南に多少の鬱陶しさを感じながらも、彼の言葉に耳を貸す。

「男には戦わなければならない時があるとは思わないか？」

「・・・」

コイツの意味不明さは持病なんだろうか。
もう呆れて声も出ない。

その様子を見てか、南が慌てて説明した内容はこうだ。

今まで、自分の自慢は並外れた力の強さだった。それがつい最近崩れ去ってしまったのだ。

それは一週間ほど前。商店街をぶらついているときだった。

何気なく目をやった掲示板に貼られていたのは毎年恒例の力自慢大会の結果表だ。今年の種目は腕相撲だったらしい。

一緒にいた仲間たちが「坂下さんなら一位の奴でも秒殺でしょうね！！」と言うので「当たり前だ！！殺ってみようじゃないか！！」とノリノリで一位の奴がいるという氷屋に向かった。

するとどうだ。秒殺されたのは自分の方ではないか。油断していたとはいえ、力の差は歴然だった。

もちろんこの竹蔵という男は力が強いというだけで、喧嘩なら負けない自信がある。それでも自慢していたモノが他人より劣っていると思うと悔しくてならなかった。

「だからこそ！あれから毎日通いつめて何度も勝負を挑んでいるのだ！！」

話しているうちに熱を上げたのが、終いには拳を突き上げて天に向かって叫んだ。

「……それで？」

「へ？」

「なんで今その話をしたんだ」

「え、だから、今からその竹蔵のどこに行くんだよ？」

南は行き場をなくした拳を揺らしながら「何当たり前のこと聞いているの？」とでも言いたげな顔をしている。

は？ふざけんなよ。

何のために走ってきたと思ってるんだ。

「……俺が来るまでにやっとかなかったのは何でだ」

「いやあ、オレにも色々と用事があるんだよね」

よし、帰ろう。

光はクルリと向きを変え、家に向かって歩き出した。

「ええ！？待って！！ちょっと待って！！すぐ終わるから！！終わらせるからあ！！」

で、

こうなった。

「すぐって・・・いつだ？」

もうすでに3分はたっている。よくこんなに続けてられるな。
だが先程の説明で秒殺と言っていたのを考えると随分成長したよう

だ。

「じつのおおおおお・・・」

「最初よりはいい感じだな、坊主。だがそんなんじゃ勝てねえぞつと」

氷屋がより一層力を込めると、呆気なく決着がついてしまった。すると周りの歓声がピークに達し、それに比例して光の苛立ちも確かなものになっていく。

「なんだよお。今日こそはと思ってたのに!!」

お前はガキか。

まるでおやつ禁止を言い渡された子供のようだ。

「悔しかったら特訓でもしてくるんだな!!」

「そうなんだよな・・・だから今朝ちよつとした特訓をと思ってる人に喧嘩売ったら吹っ飛ばされちゃうし・・・」

「・・・は？」

それは今朝の待ち伏せのことか？

あれはこの腕相撲のためにしたことだったのか？
冗談だろ？

「ちよつとまで。お前今特訓って言ったか？」

「へ？あ、いやぁ・・・あははは」

南は光が真後ろに立っていることにたつた今気づいたようで、ハッと息をのんだ後苦笑いを浮かべた。

まさか・・・。

「そのちよつとした特訓とやらのために俺は遅刻させられたのか？」

元々気分が優れなかった所為もあり、苛立ちから徐々に声量が大きくなる。

周囲のざわめきも、もう気にならなくなっていた。

「いや！！そんなまさか！！だから、その・・・ねえ？」

「・・・」

光は自分の中で何かのスイッチが切り替わったのを感じた。

「違うんだよ！まさかコウちゃんがこんなにいい子だとは思っても
しなくって！！」

「・・・へえ」

俺が、いい子・・・ねえ？

面白い事を言うじゃないか。

では御期待に沿って、声を荒げるなんて子供じみた真似はよそつ。

優しく、あくまでも穏便に。

光は苛立ちが限界まで達するとそれ以上のストレスを受けられないよう
に、その状況を楽しもうとしてしまう。

もちろん、無自覚だが。

それは今回も例外ではなく、どうやって目の前の奴を遊んでやろう
かとほくそ笑んだのだった。

「じゃあ、俺がいい子に育っててよかったなあ？もし悪い子に育っ
てたら・・・いやあ、アブナイアブナイ」

「じゅ、ごめ・・・なさ・・・」

足元で恐怖にわななき目に涙を浮かべる南を見て高揚感に包まれた
光は、さらに距離をつめて言葉を重ねる。

「ん？どうして謝るの、南君？」

南は助けを求めるように辺りを見渡した。

無駄だ。たとえ誰かに咎められようと、耳を貸すつもりはない。

しかし想定外というものは常に存在するもので、何者かがこの遊戯を邪魔立てするように人混みから飛び出した。

そんな事知るものかと無視を決め込んだ光だったが、その者の声を聞いてハッと我に返った。

「ひ・・・光!!」

「・・・林檎・・・？なんでここに・・・」

・・・そうか。

この商店街は高校から林檎の自宅までの道のりのちょうど中間地点だ。

俺を見失って時間に余裕ができたから遊びにでも寄ったのだろう。

「あ、あれで撒けるとでも思った？ずうっとつけてたんだから!!」

・・・。。。

いや、追いつけてなかったし。
超動揺してんじゃない。

後ろに控える松下も驚きを隠そうともせず、林檎を見つめていた。南に至ってはまだ恐怖感が抜けないようで、しゃがみ込んだまま林檎と光を交互に見上げている。

せっかく二人が接触するのを避けるために撒いたというのに……。南のことだ。俺の周りに女がいるというだけで質問の嵐だろう。よくわからないが、奴の中の危険物ランキングでは学校の次に女がランクインしているらしいのだ。

俺の苦勞を無駄にしゃがって……。

「……何？そんな暇なの？君たち」

「ひ、光がお友達いじめてるから止めに来たんだよ！！」

「……いじめてねえよ」

「ハタから見りゃいじめてるように見えるのさ」

いや、いじめたけど。

それでも悪いのは俺じゃないはずだ。

「今の聞いてた？今日遅刻したのこいつのせいなんだぞ？」

「だからゴメンってば!!」

なんだその言い方は？

ひざまづいて言えクソガキ。

と言おうとしたが、正気に戻った光には羞恥というものが存在している。何とかがとまることができた。

とりあえず場所を変えなければ。人の多い商店街では学校に噂が届いてしまう可能性がある。

そこで光は南の胸倉をつかみ、人の少ない場所を求めて歩き出す。南は何の抵抗もしなかったが、一度だけ鼻をすする音を聞いた気がした。

しばらく歩くと、商店街の入り口あたりにある公園が目に入った。

確かあそこには公衆トイレがあったはず。

よおし、説教タイムだ。

光がトイレに向けて歩幅を広げると、不安そうな顔をした林檎が追いついてきた。

「ねえ光、かわいそうだよ。制服も伸びちゃうし・・・」

「知ってる」

どうせめったに登校などしないのだから気にする必要はないだろう。その時南が何故か体勢を低くしたので様子をうかがうと、大きい両の手で顔を押さえて指の隙間からこちらを見つめていた。

「コウちゃん……どこまで行くんだよ……なんかいやんなってきた……女2人に見られてるよ、恥ずかしいよ!？」

「わあかつたつての!! デカいのが両手で顔隠してる方が恥ずかしいんだよ!! 普通に歩けバカ!!」

こいつは本当に同い年か？

みつともない奴だ。

仮にも自分の「親友」だと思つと一緒にいるこちらが恥ずかしくなってくる。

しかし南は光の言葉に何やら不満があつたようで、少しだけ手をずらして言い返してきた。

「今バカつて言った!？ 引きずられてちゃんと歩けるわけないだろ!？ コウちゃんのがバカ」

………バ？

それを聞いたとたん、光は殺意が芽生えてバツと後ろに振り向いた。そして目だけを動かして脅すように睨みつけると、南の体がその場に凍り付いたようだった。光はここが商店街だという事も忘れ、本能のままに怒りを体外へと流出させていた。

しかしそれもすぐに止むことになる。何故なら、またも林檎が飛び出してきたから。だが一つ先程と違うのは、左腕に妙な重圧感があ

ることだった。

「待って！！ストップ！！タンマ！！」

どうやら林檎が何とかして光を止めようとしているらしく、きつく左腕に巻きついてこちらを見上げているようだった。

その密着具合は光にとってある意味でのトラウマである。例によって光の思考は停止状態となり、自然と林檎を見つめる形になる。

そして林檎が潤んだ瞳で覗き込むようにして再び口を開くところ言った。

「ちゃんとお話、しよ？ね？」

その瞬間、鼻の奥から熱くこみ上げるものを感じた光は南を掴んでいた手で顔を（鼻を中心に）覆った。それと同時に林檎から顔を背け下を向いたが、予想していた事態にはならなかった。向いた先には松下が腕を組んで立っており、目が合ったとたんに吹き出す素振りを見せたために一瞬の苛立ちを覚えたが、まだ発作の余韻が残っていた光はそれどころではなかった。

「え？コウちゃん？」

「光？」

後ろから聞こえる二人の声は自分を心配している様に聞こえたが、確実に赤く染まっているであろう今の顔を見せるわけにはいかない。かと言って声を出すこともできそうになかった。仕方なくニヤついた松下を睨みつけながら呼吸を整えていると、柔らかい何かを押しつけられていた左腕が解放されたのを感じた。すると目の前に今にも泣き出しそうな顔の林檎が現れ、グイと近づいてきたではないか。

「ひ、光！？どうしたの？苦しいの????」

「わっ！！バカ、くんな！！」

突然の出来事に心臓が跳ね上がり、思わず顔を背けてしまった。

またやってしまった。

土曜日の朝に渚から言われたことも忘れてまたこんなことを……。すぐに誤解だと伝えなければ、この間のように泣かせてしまつかもしれない。

そう思った光は急いで林檎を振り返った。すると林檎の顔に涙はないが、代わりに咎めるような視線が向けられていた。

それは呆れたような、苛立っているような。そんな面持ちに見えた。

つまり、怒らせたのだ。

16 金髪君行進曲（前書き）

今回は坂下南の脳内目線からお話が進んでいきますが、一応本編です。

16 金髪君行進曲

「・・・あああ、やっちゃった」

「うるせえよ・・・」

「このままじゃ明日も口聞いてくれないだろうなあ」

「楽しそうだなおい」

・・・意外だった。

コウちゃんは硬派な一匹狼だと思っていたが、人は見かけによらないものだ。

他人に興味がなさそうな彼が、たった一人の少女に四苦八苦している。

「コウちゃんも一人の人間だったんだ・・・」

「お前はホントになんなんだ・・・」

本気で落ち込み始めたコウちゃんを励まそうと、飲み物を買って近くの公園に入った。

そしてベンチに倒れ込んでしまったコウちゃんの隣に腰掛けると、日除けもないのに手元に影が差した。何かと顔をあげてみると、ほんの数センチ先に自分を見つめる茶色みがかった瞳があった。

「わあ！！」

離れてよく見てみると、先程からコウちゃんの隣をウロウロしていた女が仁王立ちで自分の顔を覗き込んでいるではないか。

「な、なんだよ。お前」

「んゝ・・・そうかぁ、確かになあ・・・」

「何か用かって言っただよ！！質問に答える！！」

「へえ、威勢がいいね。イケメン少年」

「なっ、い、イケメン？」

「君のことだよ？何、恥ずかしいの？」

なんなんだこの女は。

何を考えているのか全くわからない。

さっきの感じだとたぶんコウちゃんの同級生とかだろう。だとしたら、「親友」のオレよりもコウちゃんのこと詳しいのかもしれない。そう考えると自然と敵意がわいてきた。しかし女はにっこりと笑いかけてくる。

「私は松下早恵。君の名前は？」

「さ、坂下南だ」

こちらが名乗ると、女は右手をつきだしてきた。

「よろしく。南君」

握手をしろと言うのか？

なんだ。宣戦布告か？

それとも見下されているのか？

やんのかこのやろっ。

一向に握手に応じないこちらをみて、女は右手を引っ込めた。口をとがらせて残念そうな顔をしたって無駄だぞ！！

「まあいいけどさ。南君、肴山の友達なんだって？」

「親友だー！！」

「……そう。じゃあさ、中学時代の肴山ってどんな感じだった？」

「は？」

中学時代のコウちゃん……。

当時は猫のような目をした猫のような少年が、襲ってきた野郎達を次々と潰していると噂で聞いていただけで、顔を合わせたことすらなかった。
卒業の1ヶ月前あたりに「ここまで猫目とかいう奴を狩るところ」という話になって初めて対面したのだ。

仲間達を五人ほど連れて行ったのだがあっさりと負けてしまい、屈辱感にさいなまれているところに彼が放ったあの一言は今でも忘れはしない。

「あ、靴紐ほどけた」

その時だ。オレがリベンジを誓ったのは。

まあそれも今となっては親友と出会うためのフラグだったのだと納得してしまうのだが。

もしかしてこの女、オレとコウちゃんが親友になったのが今朝だと聞いてないのか？

「・・・コウちゃんにオレの事何か聞いたか？」

「いや？今日友達と会って言ってただけだよ。だから君に聞いた方が早いと思っさ」

友達！！

なんと心に響く言葉なんだ!!

南はうれしさのあまり拳を握りしめて光を振り返った。しかし彼はこちらに気づかず、うなり声をあげてベンチの下を凝視している。どうやら食べ物を求めて近づいてきたハトを威嚇しているようだ。

「こ、コウちゃん？」

「……とうとう壊れたか」

壊れただって!?

確かに頭部と右腕がベンチからこぼれ落ちている様はサスペンスドラマの死体さながらである。

ここは公園。純真無垢なよい子たちが集う場所。そこにこんな人間がいれば興味が引かれるのは当然の事だった。

「コウちゃん起きて!!なんかやばいよその格好!!」

何とかまともに座らせようと光の上半身を持ち上げたが、本人にその気はないらしく首がダランと垂れてしまっていた。

「ちよつとお!?!生きてる?お兄さん生気が感じられないんだけど
お!?!?!もしもおし!?!」

こうなったらもうヤケだ。
南は死体の肩を大きく揺さぶったり耳元で叫んだりして蘇生をはか
った。

いいかげんではあったが、どうやら効果があったようだ。十数秒後
には南の顔面目掛けて右ストレートが飛んできた。急いで避けたつ
もりだったが、頬骨に少しかすってしまった。

「!!!!.....つぶね!!コウちゃん!?イタイよ!?何で
殴ったの!!!何で殴られたのオレ!?!」

「.....首痛い」

「だろつねえ!!!」

あんだけやればそりや痛いわな。でもあのぐらいやんなきや起きな
かったのアンタだよ?

光はうつろな目をしていて、首もまだ傾いたままだった。

それでもやっと思答があったので肩を掴んでいた手を退けようとす
ると何故か左手首をガシツと掴まれてしまった。

「ひっ」

あのうつろな目がこっちを見ている。

光だとわかつてはいたが3日ぐらいは寿命が縮んだような気がして

しまった。

よく見れば唇を細かく動かしてなにか言っているようだ。

「お……だ……」

「……え？今、なんて？」

「俺は……だ」

「?????」

良く聞き取れない。

首を傾げてもう一度聞き返すと、力尽きたのかぐったりと南に体を預ける形になる。

「こ、コウちゃ……」

「バカだよなあ……全く……」

そう呟いた光は小さくまるまって南の胸に納まっている。

やっぱり小動物みたいだ。「ちゃん」をつけたのは間違いではなかったと改めて思う。別に光が特別小さいわけではないが、南との身長差はまるで兄弟だ。

南は弟を持った気分で光を宥めるように背中をポンポンと叩いた。

「松下……」

「ん？」

「おまえに聞くのもあれんだけどさ、その……」

「なにさ」

光は少しだけ顔を上げて女と目を合わせるとゆっくりではあるが起き上がって座り直した。

「林檎は……」

「うん？」

「何に対して、キレたんだ……？」

「……は？」

光の問いかけが予想外だったのか、五回ほどまばたきをした後呆れ顔で長いため息をはいた。

「し、しょうがねえだろ！！俺はついてくんなって言われた事で頭いっぱいだったんだよ！！」

「そんなん知らないよ。林檎は私置いてっちやうぐらい頭にくるこ」

と言われたんだから」

「・・・置いてかれた自覚あったんだな」

「どうしてくれんだよ。帰り道わかんないじゃないか」

この女は仁王立ちが好きなのか。

常に腕を組むか仁王立ちをしているように思う。

コウちゃんは頭を抱えた体勢のままいろと思案していて、さっきの鳩が足元に寄ってきてきても見向きもしなかった。

「そんなんじゃ知恵熱出すぞ肴山」

「何！？熱だつて！？コウちゃん、熱出すのか！？」

「知るか！！」

元の調子でツツコミを入れる光だが、その瞳は涙で潤んでしまっている。

そしてグシャグシャと髪をかき回した後、思い詰めた顔をして呟いた。

「やっぱ、バカって言ったから・・・？」

それを聞いて女が再度ため息をついた。

「ただバカって言っただけじゃあんなに怒んないって。言葉だけじゃないんだよ」

「・・・顔背けたのが悪かったのか？」

「はい残念。・・・明日答え合わせしてやる。お布団かぶってよく考えな坊や」

「同級生に坊や呼ばわりされたかねえよ。・・・でも・・・今日は一人でゆっくり考えたい」

光はそう言って立ち上がり、こちらを向いて苦笑を浮かべた。

「悪いな、南。ゲームはまた今度だ」

「おう・・・家まで送ろうか？」

「俺が地元で迷子になるようなやつに見えるか？」

「そうじゃないけど」

「・・・サンキュ。またな」

「ああ。また」

だいぶ憔悴しているように見えるが、足取りはしっかりしていたので黙って見送ることにした。

時刻は5時前。

公園で走り回っていた子ども達は母親に手を引かれて帰り始めていた。

「松下・・・だったか？」

南がベンチから呼びかけると、松下はにこやかに近づいてきて隣に腰掛けた。

「もう覚えてくれたの、ありがとう。出来れば早恵って呼んでほしかったけど」

「コウちゃんは名字で呼んでた」

「まあ、ね・・・学校じゃ違うけど」

「ん？」

「何でもないよ。仲良いんだね、親友って感じるよ」

「ホントか？」

「うん・・・？」

今朝結ばれた友情がもう馴染んでいるようだ。確かにコウちゃんといくと落ち着きはないが、安心感がある。まるでずっと一緒にいたかのような、心地の良い感覚。

「フンっ！親友なんだから、当然と言えば当然だな！」

「・・・でも性格ってというか、生き方はだいぶ違うようだね」

「ん？なんか言ったか？」

ふるふると横に首を振る松下を見てそうかとすぐに納得して立ち上がる。

「コウちゃんいねえんじゃここにいたってしょうがねえな。おい、立て。行くぞ」

「え？」

松下は不思議そうに首をひねるが、南は公園の出口に向かって歩き始めていた。

急いで追いかけてきた松下を横目で見ながら歩幅を小さくして問いかけた。

「どの辺だ？」

いまいち言葉の意味が伝わらなかったのか、「何が？」と聞き返されてしまった。

「おまえんちだよ。どこだ？」

そう答えると、松下が嬉しそうに微笑んで南の隣を歩き始めた。

15分程歩き2人が駅付近に到着した頃、松下の携帯電話が持ち主を呼ぶ音がした。松下は「ちょっと失礼」とそれを耳に当てて相手を確認し驚いたように話を聞いていたが、すぐに「え？」と声を上げて立ち止まってしまった。

「林檎が・・・？」

その珍しい名に聞き覚えがあつた南は松下の愕然とした表情に言いようのない不安を覚えた。

コウちゃんが必死になつて呼び止めようとした少女。会話こそしていないものの、ついさっきまで顔を合わせていた人物。

「さっきの子がどうかしたのか？」

さすがのような表情で自分を見上げる松下を見れば、返事を聞かずとも答えは明らかだった。

多分、吉報でないことは確かだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8359h/>

僕の世界。君の世界。

2011年10月1日13時10分発行